

20世紀・私の好きな建具

松本 昌義

■建具にこだわりを持つようになったいきさつ

私が建具に特に興味を持つようになったのは、今から7年前、師匠の吉田桂二さんと出版社との打ち合わせがあるから同席するよう声を掛けられたことがきっかけになった。1992年の年が明けて間もないころ、「建築知識」の遠藤氏が月刊誌で木製建具の特集を組むということで連合設計社に相談に来ていた。当時の私は、勤めて9年目の中堅所といった所員であり、「加茂サッシ」(図1)の開発に所員の立場で協力するという経験はしていたものの、建具についての一般レベル以上の知識があったわけでも格別な興味があったわけでもなかった。打ち合わせは特集の内容とか桂二さんのルポ先などについて行われ、私はそれを傍らで聞いていた訳だが、その席でいきなり、「加茂サッシと障子についてはお前が書け」と師匠に言われて大いに慌てた。「え、雑誌に書く程知りませんよ」と言って辞退しようとしたが、「障子の組子の割付けとか付子とかは知ってるだろう。たまには背伸びすることも必要だよ」と言われてしまっては引き受けざるをえない。今にして思えば、師匠の親心からのことであったわけだが、それまでの私は、建具に関する知識以前の問題として、学校の作文以外にまとまった文章などは書いたことがなかったし、作文は大の苦手であった。

その後2ヶ月間、事務所以外の時間を使い、文献を調べ、脂汗を流しながら原稿を書いた。冷や汗ものの原稿はB5版12頁にまとめられ、「建築知識」92年4月号に掲載されたが、師匠によって赤チェックが入れられた原稿を読み返してみては言い回しについてなるほどと思い、また、奥深い建具の世界を垣間見る機会が与えられたという意味からもよい経験になった。

その後の数年間に、同じ「建築知識」の別冊「木のデザイン図鑑」と「和風デザイン図鑑」に木建建具に関して執筆する機会を与えられ、やはり文献や知人などからの情報および実務での経験をもとに、何とか一定レベル以上のものにまとめ上げることができたと考えているが、「木のデザイン図鑑」の原稿を書きながら感じたことは、建具の見え掛かりのデザインはともかく、細部に関しては設計者の知識だけでは自ずから限界があり、毎日本に触れている建具職のノウハウが不可欠ということであって、「和風デザイン図鑑」を書く前に、岡部さんの紹介である建具職と出会うことができたことは幸いだった。

これらの執筆を通じて、開放的な空間、つまり柱間の大半を建具が占める日本的な空間

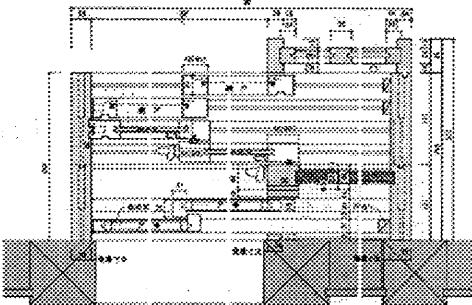


図1 全開型加茂サッシ平面図

連合設計社当時、私は加茂サッシの細部納まりの検討や図面整備、および品番や規格寸法表の整理などを担当した。

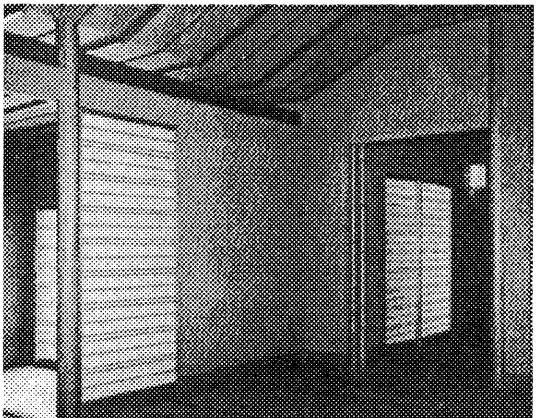
において、内外の意匠を決定的に左右する要因はやはり架構形態であるとしても、それに次ぐもの、特に内部意匠の要はやはり建具であると確信するようになったが、建具に関する解説書には、空間と調和した建具デザインの大切さを謳っているものが多いにもかかわらず、それについて具体的に言及しているものは意外に少ないことも解ってきた。

■建築空間と建具との関わり

今年の6月に、前述した建具職（李正 新井正さん）と共同企画した「木製建具デザイン図鑑」の「建築知識」からの出版になんとかこぎつけた。企画から3年、実際の執筆には1年半かかり、多数の同人仲間の協力を仰いだ。本のテーマは「建築空間と建具との関わり」。私が設計した「古河の家」（佐々木邸、佐々木さんも同人の仲間）に採用された全ての建具（製作は新井さん）について、空間との関わりという観点から解説するということを骨子として構成されている。

この本の内容について、これ以上触れている余裕はないので、詳しくは現物をご参照願うとして、建具について調べていると必ず遭遇してしまう一人の建築家についてここでは触れておきたい。その人の名は吉田五十八。いまさら説明の必要もないと思うが、戦前から戦後にかけて、日本建築の近代化ということに精力を注いだ人であり、私の師匠の師匠に当たる。不勉強なことに、これまで私は氏の作品についてじっくりと腰を据えて見たことはなく、本をパラパラとめくつて知っていた程度。本の執筆中も気になっていたが、詳しく調べている余裕もなく、少し落ち着いた今になって改めて写真をよくながめてみて、その空間の斬新さに今更ながら驚かされている。彼が創作した大壁を主体とする空間においては、彼の美

写真1 吉田五十八設計による住宅



(建築知識：木製家具デザイン図鑑より抜粋)

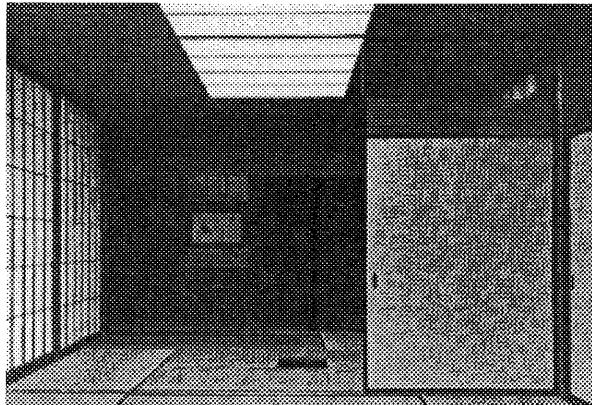
意識にとっては余計な線を極力消し去ろうとする姿勢が貫かれ、建具の枠廻りにおいても「ハッカケ」を多用した厳しい納まりが用いられている。写真1（前頁）を見ていただきたい。2室に連続した折り上げ天井による流動感溢れる空間。そこに入る建具は、天井の棹縁と調和した吹寄せの横桟だけからなる障子でなければならなかつたのだろう。自分が意図した空間を実現するために、全ての構成要素を吟味して収斂させようとするその姿勢には執念のようなものが感じられると同時に学ばされるものが多い。

■私の好きな建具

よい建具とはどの様なものかということを一般論として述べるならば、それが入れられる部位に要求される機能を満足することはもちろん、その空間と呼応して互いに美しさを助長しあうようなものと言うことができよう。先に挙げた吉田五十八の障子のように、建具は空間との関係性の中においてデザインされ、その優劣が議論されなければならない。

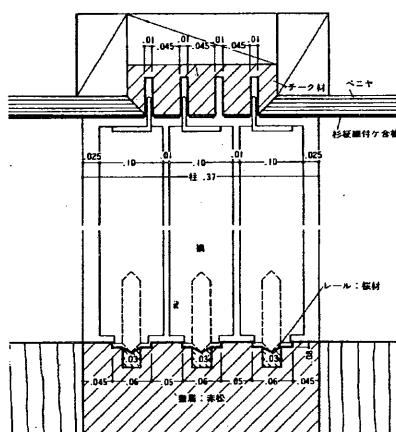
この視点から、私の好きな建具をやはり吉田五十八の作品の中からひとつ選ぶとすれば、北村邸の12尺間3枚建、天井高いっぽいまでの座敷襖を挙げることができる（写真2）。天井高までの襖としているのは空間の連続性を狙ってのことであり、鴨居を入れるのは開放した時に残る鴨居の線を嫌ってのことであろう。襖には内法の高さで中桟が入れられ、そのプロポーションを整えると共に、天井を連続させて伸びやかに見せるために吹抜けにした、一般的には欄間に当たる部分にはその下部に漆塗りの横繁格子を入れて間延びしないように工夫している。また、通常の納まりならば天井から出っ張る鴨居も消した納まり（図2）の徹底ぶりは、頭が下がるほどに清々しい。さらに、戸当りになる柱は回転し、襖を戸袋に引込むことができるという驚くべきカラク

写真2 北村邸（設計吉田五十八）の座敷襖



（建築資料研究社・吉田五十八研究より抜き）

図2 北村邸座敷襖廻り詳細図



（出典は写真2に同じ）

りもある。

次に、建具のデザインはその形状のみならず、使用する材料に関しても当然その範疇に含まれるものであり、空間に見合った材料を選びデザインすることが望ましいと言えるが、時には材料から発想したデザインが説得力を持つこともある。近頃の私は国産材の使用にこだわった住宅の設計を手掛けており、節有材を積極的に使っている。こうした空間においては、一般には無節の柾目材をよしとする建具材といえども、節有材や板目材の方がむしろ似合うと思える場合があり、さほどの長さを必要としない建具材にもそれが使えるとなれば国産材の有効利用にもつながろう。ただし、節有材や板目材は狂いやすい材料なので、建具職の理解と協力および納まり上の工夫が必須となる。

この視点から私の好きな建具の一つに、手前味噌ながら「古河の家」に採用したサブの玄関戸を選んだ（写真3）。この建具は「古河の家」の玄関土間、応接コーナ脇の南庭への出入口に建て込まれている。材料には杉の節有材を厭わずに使用している。腰板には杉丸太の根元に近く木目の揃わない部分、通常ならば捨てられてしまう部分を特別に製材してもらった幅広の無垢板を使った。この建具は私と李正の新井さんとの共同によるデザイン。同様の方法によった同じ「古河の家」の玄関土間に面して採用された中抜き舞良戸（写真4）もついでに紹介させていただこう。新井さんとはこの建具の敷居溝の深さの違いから派生する、大工仕事の精度の変り様を現場で話したことを思い出す。

文献によると吉田五十八は職人と話をしながら仕事の実際を覚えたそうだ。そういえば、昔流し読みしたことのある三一書房から出版された「現代建築家全集」とかいう本に五十八の言葉として、「ぼくは変わった建具を色々と考えたけれども、建具屋のだれそれ君がいてくれたからものになったんだ」といった旨の述懐が書いてあったことをうっすらと覚えている。

さもありなんと思い、誤解を恐れずに言うならば、私もそうありたいと願っている。

写真3 「古河の家」サブ玄関戸

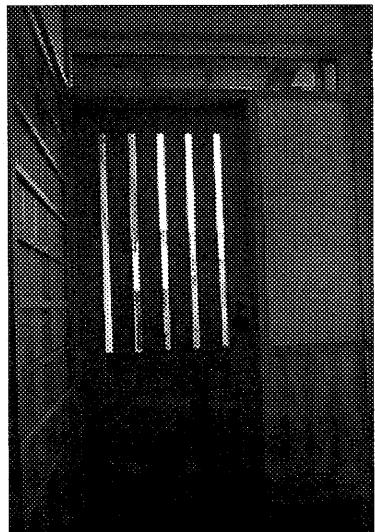
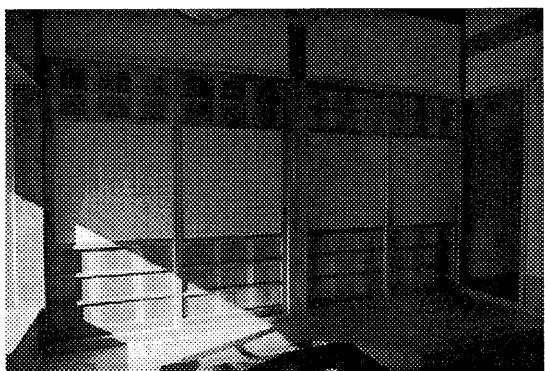


写真4 「古河の家」の玄関土間に面した中抜き舞良戸



私の好きな建築

水 谷 由 香

2000年という響きに、時代の変わり目を意識させられる。20世紀の終焉と考えればノスタルジックな気分にもなるが、それよりも新しい世紀の始まりに対する期待感のほうが勝っている気がする。2000年がやってくるのは、今日の次に明日がやってくるようにあたりまえのことなのだが、1000年に一度の節目と捉えると、やはりぼんやりとはしていられなくなる。

私はあるメーカーで腕時計のデザインをしている。そういうわけで、人と時間との関わりを考えたり、人が唯一身につける小さな製品がどうあるべきか考えたりする。

建築物に比べると吹けば飛ぶような歴史しか持たない腕時計だが、たぶん身につけるからであろう、これには強い思い入れを抱く人が少なくない。そして、彼らの多くが「やっぱり、スイスのメカ時計に限る」という類のことを言ったりする。確かに腕時計の短い歴史の中でスイスのメカは初期の完成形であるから、これに敬意を表し「いいなあ」と思う気持ちちはよくわかるし、私もそう思う。歴史であり、伝統であり、匠の技なのだから素晴らしいに決まっている。しかし、そうした評価は少し当たり前過ぎて退屈に思える。そして、私はこういう気分をたいていのモノについて持っている。建物についても同様だ。何か新しいものを作るのであれば、それは既成の価値観とは違う何かであってほしいし、できるだけ、実験的なほどに新しいコンセプトを持っていてほしいと思う。

いうまでもなく、たいていの場合建築物は、他のモノに比べてスケールは大きいし、その期待されるライフサイクルは非常に長い。いったん建造することになるとコスト面はもちろん、次々と移り変わるであろう生活者のニーズにマッチしてくれるのかどうか長い目で見た検討が必要になってくるし、建てたら建てたで維持するためにはそれなりの気配りや忍耐が要ることであろう。

そういうわけで、建物は実験素材として扱うには難しいのだろうが、それでも何かしら新しいコトを提示してほしいと思う。たとえ後にそれが失敗だと言われたとしても、そのアプローチ自体は評価されるに違いなく、それこそが歴史を作っていくのだから。

色々なモノについて考える。目の前にあるパソコンやデスクライト、ペン、時計やテレビ、今すわっている椅子。本棚やソファーや水槽に花瓶やごみ箱。書いていたらきりがないほ

どたくさんのモノ達。そういうモノ達を、私を含め包み込んでいる建物という器。建物は、外から眺め回して楽しむこともできるが、私は、中に入ってそれが作り出す空気を味わうことのほうが面白い。(実は、面白いというほどには、いつもはその存在を意識してはいないのだが)

建物については、無垢な感じがするものが好きだ。私は無垢なものに包まれていてほしいと思う。モノがそのものであるように見え、私がわたしでいられるような無垢な建築物に包まれていてほしい。

無垢について私は異なった二つのイメージを持っている。一つは何の色もついていないあまり人の手が入っていない「イノセント」な感じのする無垢さで、もう一つは研ぎ澄まされ洗練されつくした「ピュア」な感じのする無垢さだ。二つのイメージは代わる代わる現れて、イノセントな無垢さがいいと思うこともあれば、ピュアな無垢さがいいと思うこともあるという具合だ。時代が求める雰囲気が変わるように、私が求める無垢へのイメージもゆらゆらと揺れ動いている。白木や漆喰のもつ天然素材ならではの温かみのある無垢さを心地よいと思ったり、ガラスの透明さや、ぴかぴか光るスチールの冷たくて高潔な無垢さに心が洗われるような気がしたりする。

イノセントな無垢さに期待するのは、ありのままの自分を優しく包んでくれる安心感のようなもの。ほっと息ができる感じ。しかし、それはもしかしたら自分について考えることを拒否した、今の自分をすべて肯定したいという一種傲慢な気分かもしれない。一方、ピュアな無垢さはというと、そのものが持つ力強い清潔さに自分すらも浄化されるような気分。いや、それよりも、対象が澄み渡っているだけに自分はどうなのかと、自分のピュアさ加減を問いただされるような、考えることを促されるような感じかもしれない。ピュアな自分とは何者か、自分を形作っているさまざまな関係性をもう一度考え方直す時間が迫ってくることを期待する気分なのかもしれない。

2000年を迎えるにあたり、私が求めている無垢さはイノセントなのかピュアなのか。願わくばピュアの方であってほしい。なぜなら、その方が健全で前向きな気がするから。

究極のピュアを体現するような建築の実験が行われることが待ち遠しい。

(みずたにゆか／デザイナー)

スカイハウス

木住研・宮越 喜彦

竣工は1958年。ちょうどわたしの生まれた年だ。すでに40年あまりの時間が経過している。文京区音羽の南斜面の崖の一角に建っている。当時の写真をみるとまさに生活空間が浮き上がり作品名そのものがすべてを表している。現在では周囲に高層マンションが建ち並び、竣工当時の雑誌に発表されたような下から見上げの写真は撮ることはできないだろう。

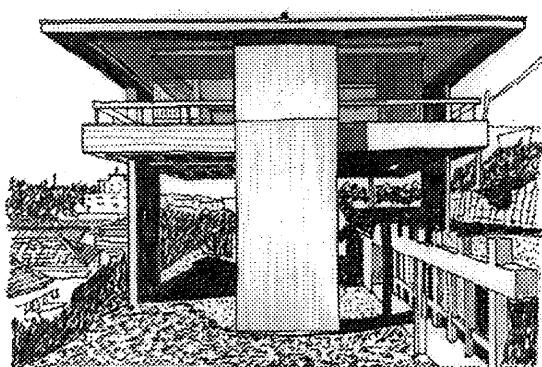
気鋭の建築家菊竹清訓が自邸で表現した日本型住宅の「かた」は、もはや戦後ではないといった社会状況の中で、ジャーナルでは最小限住宅などが華やかな時代に新鮮な輝やきをもっていたであろうと想像する。

構造はコンクリートで床をワッフルスラブ、屋根をH.P.シェル、そしてそれらを支える独立した4本の壁柱。これだけの単純な要素で架構をつくっている。その中に軽量鉄骨、ガラス、木製建具などによって生活空間が構成される。新しい工業素材や技術はこれから建築表現の可能性を提示していた。

ここでは4間角のワンルームの内部空間が与えられ、その外周に1間の広縁を回し6間角の床版によって階が構成されている。注目されたのは、これから的生活の変化にいかようにも対応できるように耐用年数の短い台所、浴室・便所などの設備を移動装置（ムーブネット）として変化しない主架構体から自由に切り離し配置できるようにサブシステム化したことである。これは後に子供部屋をワッフルスラブの下にユニットとして小判ザメのように吊り下げるこへとも展開する。現在は、増改築を繰り返して面積も広くなっているようだが、生命体として今なお更新しながら生き続けている姿には学ぶべきものが多い。

時間変化に応じた生命の新陳代謝の仕組みは、それ以前に菊竹氏が木造の解体や移設などの仕事に携わる中で、木造建築の空間や部材の更新システムに着眼したことにはじまり、そのオリジナルは木造建築の母屋と下屋の関係であると著書にいう。それがその後のメタボリズムの運動へとつながっている。

日本の住宅建築にあっては、スカイハウス以降にジャーナルをにぎわすものはあっても、そのインパクトの大きさをしのぐものを見にした記憶は残念ながらない。



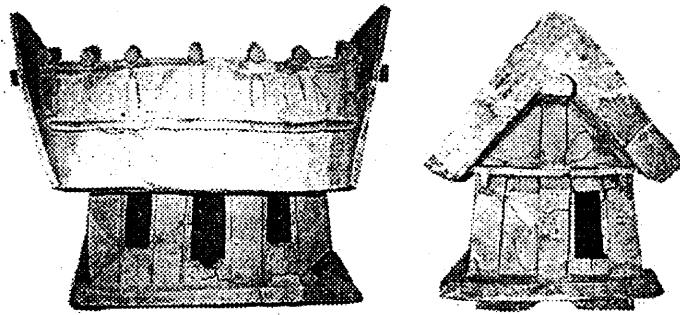
スカイハウス 1958

鰐木—伝承と記憶—

山本 堅太郎

「好きな建築」でなく、好きな「建築の話」をさせていただきたい。『古事記』下巻に次のような記事がある。

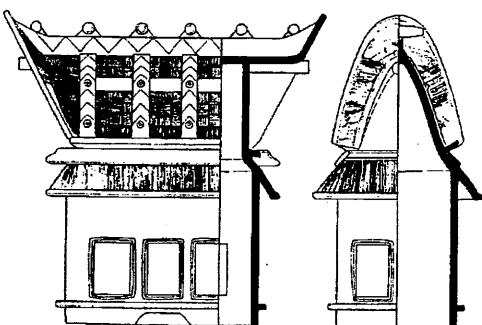
雄略天皇は、のちに皇后となる若日下部王に求婚するために、日下に行幸した。道中山の上から河内の国を見晴らすと、棟に鰐木志幾郡の大県主（地方の首長）の居館である。天皇、「いやしむべき下臍の分際で、おのれの家を天皇の御殿に似せて造りおるわ」と言って、人をやってその館を焼かせようとした。大県主は恐れ畏まって、「下臍なものですから、下臍らしくうっかりしておおりまして、誤ってこんな風に造ってしまったとは、恐縮の至りであります」と謝罪し、白い犬を贈り物として献上した。そこで天皇は火をつけることをやめさせ、その犬を手みやげにして皇后と婚約した。



実はこの記事、後半の婚約云々をむしろ主題とするのだが、そちらは端折った。ここでは鰐木を中心に考えてみたい。

鰐木は現在でも神社建築に見ることができる。屋根の棟木の上に、棟木と直角に並べられた丸太がそれである。伝統的な装飾として置かれているのだが、本来は実用的なものだった。大きな居館を建てるとなると、その屋根を葺く茅も膨大な量になる。頂上部で堅く束縛しなければ、散乱してしまう。そこで屋根内外の棟木でもって茅を挟みつけるわけだが、鰐木とはその棟木にきつく縄をかけるための横木であったという。つまり豪邸を築造するのに特有の工法であり、そのために豪邸を建て得る人物の地位をも象徴するようになったのだろう。装飾としての意義がそこに生じる。

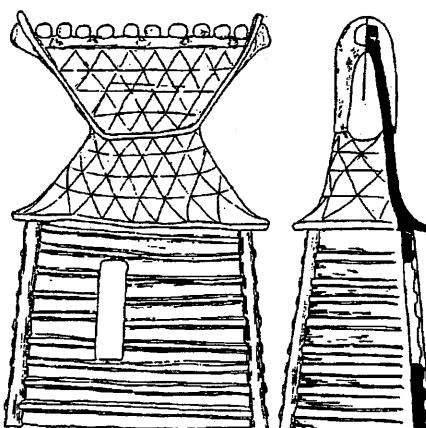
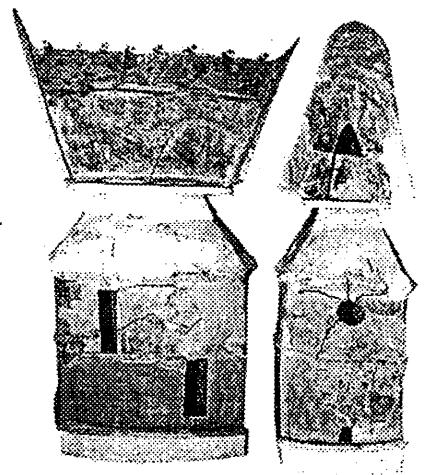
以上のような経緯から、『古事記』の鰐木は天皇の権威の象徴だと解される。しかしこれは、そのままには受けとりがたい。もし鰐木が王権の象徴であるなら、志幾の大県主



は知らずに王権を僭称したことになる。ゆゆしき大罪である。ところが彼は罪を問われないばかりか、居館までも焼かれずに済んでいる。献上物があったとはいえ寛大に過ぎる処置である。どうやら別途の理解を講じる必要がありそうだ。

宮本長二郎氏の研究によれば、現在発掘されている家形埴輪を編年的に分類すると、5世紀初頭まで鰹木をのせた埴輪は出土していないが、5世紀前半から6世紀半ばにかけてその出土例は漸次増加する。そして6世紀後半以降鰹木保有率は97%にまで達する。これは当時の豪族居館の実状を示すものだろう。おそらく実用本位に案出されたものが、装飾的意義を認められて、各地の豪族に続々と採用されるに至ったのだと思われる。雄略天皇の治世は5世紀後半であるから、ちょうど鰹木が急速に普及する時期にあたる。とてもいちいち見咎められないだろう。

以上の事からすれば、件の伝承が歴史的事実であったとは考えられないけれども、そこには後人の、鰹木に係わる歴史的記憶が揺曳しているように思われる。いまはどの豪族も使うけれど昔はそうじゃなかった、というキャラクターを媒介として、このような伝承に変容したのではないか。鰹木はそれによって天皇に由来する権威を認められると同時に、衆庶にとっても親しみやすい事物となる。そしてそれ以後は伝承が人びとの記憶を代弁するのだ。古代の伝承のなかには、そうして喪われた記憶の断片がいくつも眠っている。



日本原始古代の住居建築
中央公論美術出版

私の好きな建物

山本厚生

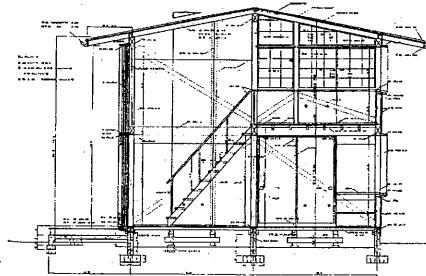
「20世紀」のと言わると重すぎて困るけど、「私の好きな」建物でなら、思いつくのは、まず、増沢渾の自邸と原邸になる。

自邸の方は、その庭先に建っていた超ローコストの事務所で8年間仕事をしたので、なじみ深いが、事務所ごと建てかえられた折に解体され、先輩所員のところに引き取られて移築された。この自邸を大学受験中に「新建築」で見て夢中になり、大学卒業前に強引に事務所に入れてもらったのを思い出す。

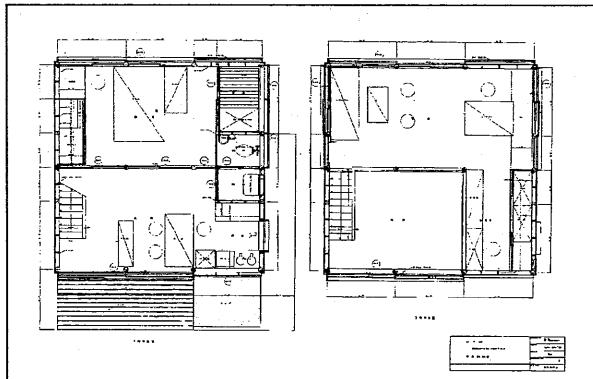
原邸の方は、数年前に、まだ現地でそのまま住まわれていると聞いたが、私は残念なことに、写真と図面でしか知らない。原邸の洗練されたコアプランや均質に広がる静かな空間、それを支える思いきった架構なども気になるが、図面を追って想像しながら住まいの中に身を置くと、日々の暮らしあざが共感できて、「住まいの美しさとは住みごこちの良さのことなのだ」という思いが実感できてくる。

私の手もとには、増沢事務所をやめるときにいただいた、ふたつの家の図面一式がある。これがまたすごい。担々として、きちょう面な図面の構成、簡明になるまでつきつめた詳細、とがつた鉛筆で正確に引かれた線に1.5mm角の文字と数字が書き込まれていて、今でも見るたびに感激する。

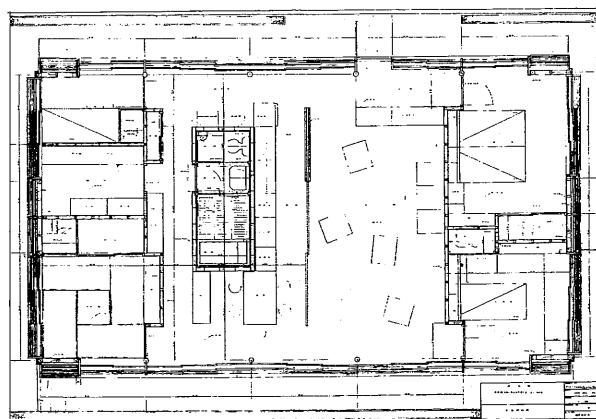
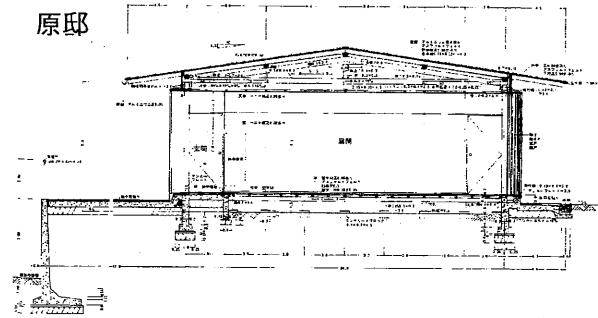
私も年を経て、住まいに対する見方や考え方が相当変ってきたと思えるけど、やはり、このふたつの家は私の原点だと思う。

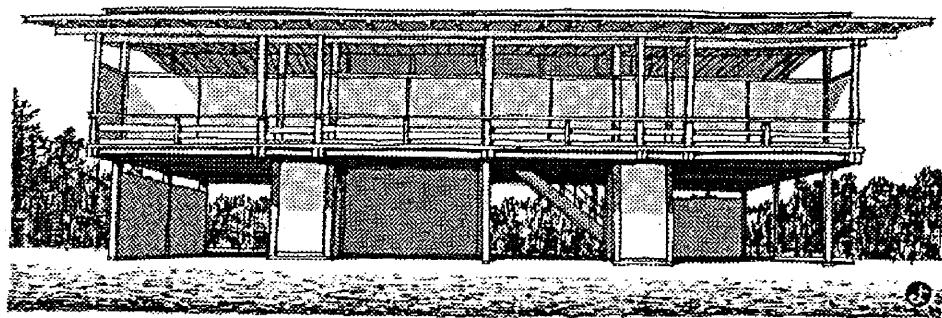


増沢自宅



原邸





1954

故・丹下自邸 吉田桂二

現在既に存在しないという意味で「故」を冠した。い
うまでもなく丹下健三氏が故ということではない。

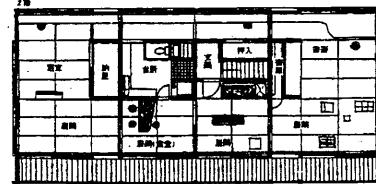
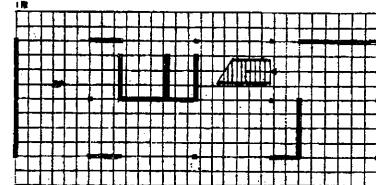
この家を外から見たことは何度もあったが、中に
入ったのは只一度、60年安保の時であった。毎日デモ
に明け暮れていた、私も含めた若者達は、その日、デ
モの後、飲んだ酒の勢いもあって、「丹下さんを明日は
デモに引き出そう」と、無謀にも真夜中にこの家に上
がり込んだ。戦後、いただきものながら燃え上がった民主化の炎が、落ち着くに至る寸前の
その頃は、こんな非常識極まる行動も、さして変でなかったと弁護しておく。その晩の
結末はここでは述べない。

1階を完全なピロティの公共空間にしたこの家は、コルビュジエの「輝ける都市」の理
念であることは明白だが、これもまた、社会主义的な理念として我々は受けとっていた。

家の外に土足を脱ぎ散らし、階段を上がって家に入るというのは、日本の生活習慣では
異例のことであったが、2階は、玄関と設備空間をコアとして中心に置き、他は全て畳を
敷き詰めた日本の伝統空間が広がっていた。外部とはガラス戸と障子、内部は襖がこの空
間を区切っている。彼は他の多くの作品にも提示しているが、彼はこれを「無限定性空間」と呼んでいた。コアプランが日本の伝統空間を純化し、新しい空間理念にしていると見た。

真夜中の、とんでもない闖入者であるにもかかわらず、絢の着物を着た美しい奥様の控
え目で、やさしい物腰での応対が心に響きを残した。この家をこの欄で取り上げたのは、
建物であるよりも、この時の彼女の印象であるかもしれない。

その後、高層マンションに移り住んでからの彼は、絢の着物よりも、レースの付いた黒
いネグリジェの方を好むようになったのではないか。作品に権力の影を濃厚にしあげめる
のと、これが重なってしまう。「豹変」といえば酷であろうか。しかしこの家は、当時の生
活を思えば無理もないが、性能的にも貧弱、安住できる家でないことも確かである。



20世紀・私の好きな建築

蓼科クラブ

吉塚 幸雄

この小さな山荘は「蓼科クラブ」と呼ばれ、故武藤章先生の設計である。

私がこの建築に初めて接したのは30年も昔、建築のケの字も知らない大学1年の時だった。

なだらかな西斜面の土地に一枚のコンクリートのスラブを作り、大きな寄せ棟の屋根をかけた単純なつくりが、周りの自然の一部になっている。さらに、熊笹が繁る斜面と建物の間に、唐松を取り込んだ大きなテラス（檜材の駒返し）があって、内と外を自然に結び、居心地の良い場を創っている。

とろとろと火が燃える暖炉、美しい夕日を望むFixガラス、大きなガラス戸が全て引き込まれるしきけ、屋根の勾配なりに作られた天井などなど、いつも私の脳裏に焼きついて離れない。

私の好きな言葉に、

まず地所を見る

地所が建築を教えて呉れる

いかに建築が許されるか

いかに生活が許されるか

そしていかに生活が展びられるか

其をそこの自然から学ぶ

其所に土も石も草も木もある

そこから建築がのびて来る

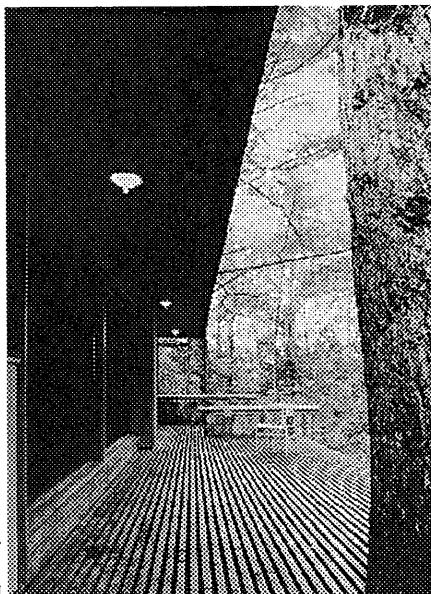
其を逆の方から云う、自然から材料を貰う、

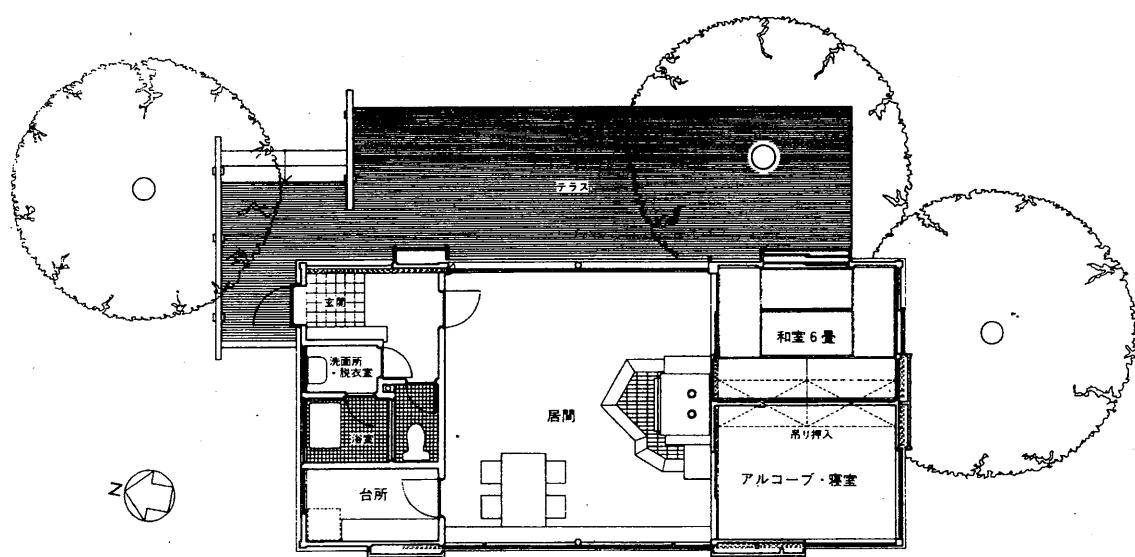
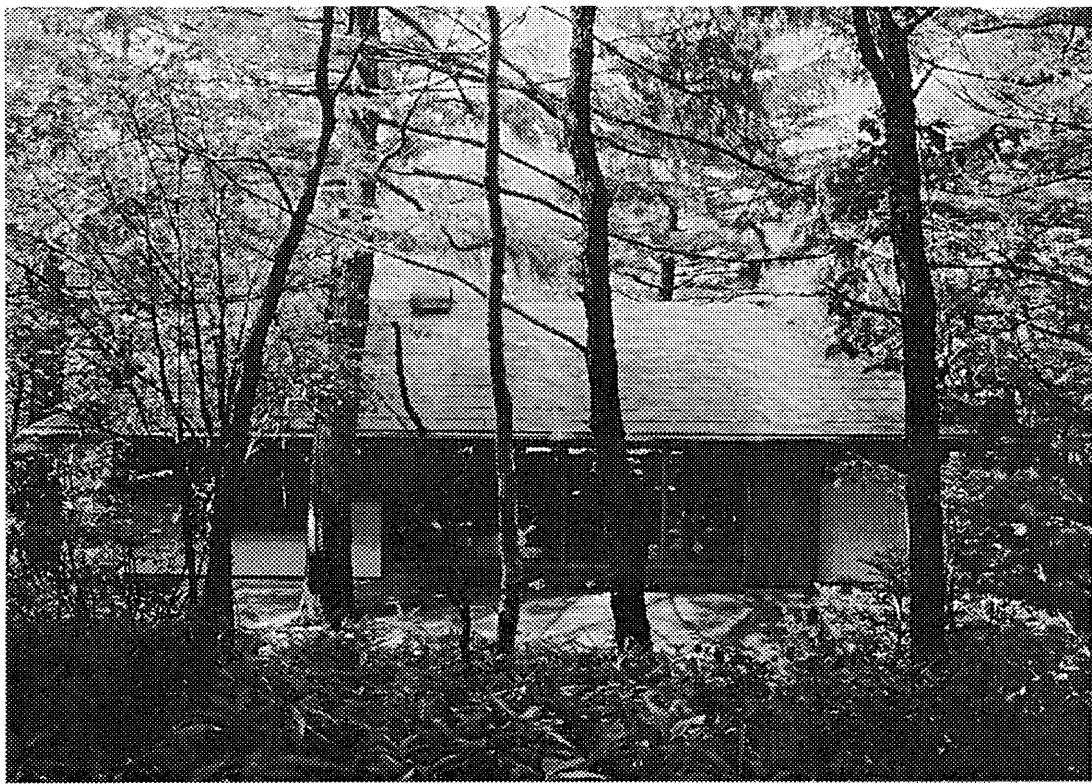
自然に合せて物をつくる。そしてその作品を

ひつさげて人間諸共、母なるまたは父なる自

然に帰る。

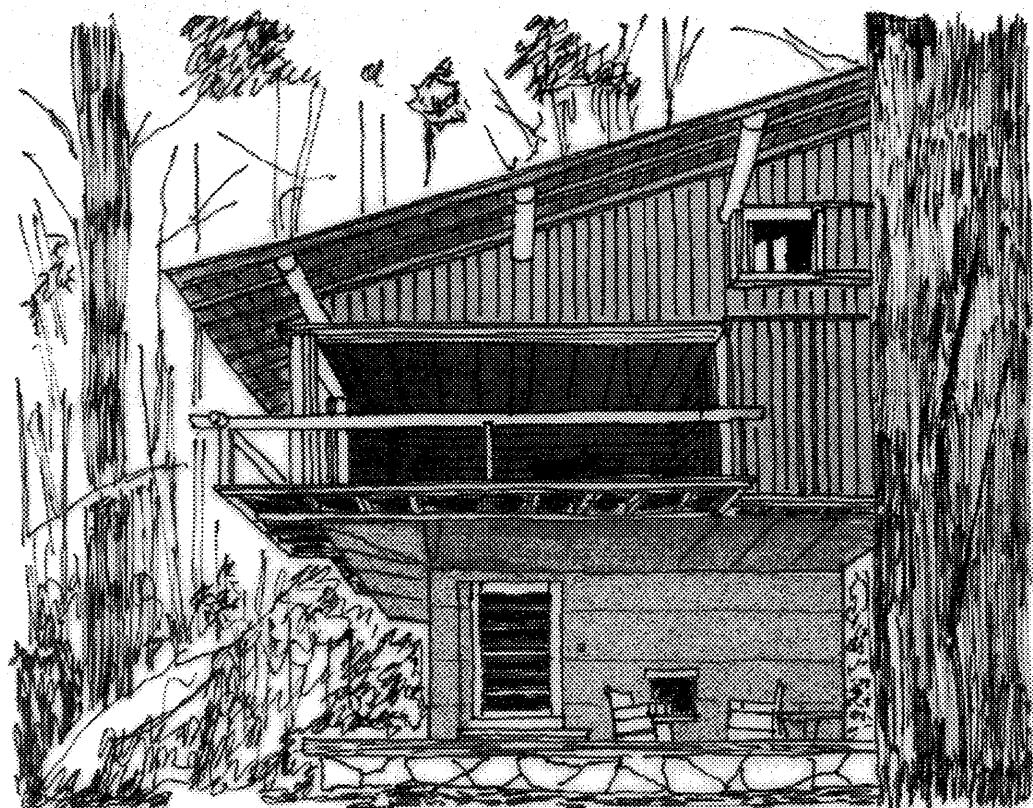
がある。これらは遠藤新が「住宅小品十五種」のはしがき（大正13年婦人の友）で、彼の建築思想を述べた言葉だが、最近私は、日本の民家の持つ風土性、地域性を良く表している言葉と思っている。新緑の頃も良し、紅葉の時も良し、美しい唐松に囲まれた茅葺きの農家のような佇まいが好きだ。





平面図（住宅建築 1987年2月号より転載）

同人レポート



軽井沢の山荘A 1962 /吉村順三

建築に使われる樹

樹と寺院

ヒノキ、それは寺院建築でもっとも一般的な樹です。関東から九州にかけて分布し、比較的礫が多く土壌の薄い所や尾根筋を好みます。ヒノキは世界で最も良質な建築材です。

仏教伝来初期の寺院は、奈良盆地周辺のヒノキを利用して建てられました。当時、奈良周辺は天然ヒノキの巨木で鬱蒼としていました。百濟から渡來した寺院建築の技術者は、大陸にはない良質材を前にして喜々として腕を振るったことでしょう。

日本の塔のカタチはどこから生まれたのでしょうか。深い軒の出と優雅な屋根のそりは、何からイメージされたのでしょうか。技術者の故郷大陸の塔だったのでしょうか。太くしなった枝をたずさえた眼前にそそりたつヒノキだったのでしょうか。

貴族や寺院の力が大きくなるにつれ、奈良地方のみならず各地の木材需要が増化し、交易が始まります。交易が盛んになると取引の共通単位として材の規格化が必要となります。

中世にはいると畿内だけで大木を集めることができず、さらに遠方から木材を運搬するようになります。この時期、国内の貨幣経済は飛躍的に進みます。商いが活発になり、商人が時代の表舞台に登場してきます。木材加工の道具も進歩し、縦引きの大鋸ができて木挽き職人が現れます。それまで加工できなかった硬い木、例えばケヤキも建築に利用されるようになります。一方、良質な天然ヒノキは資源が乏しくなり、スギが多用されるようになりました。スギや雑木、細物の重用は、数寄屋建築隆盛の下地となったのではないでしようか。建築分野では、それまで寺院や領主が抱える大工さんによる直接施工だったものから、入札による請負施工方式に徐々に切り替わってゆきます。

近世に入って、貨幣経済がますます進むなかで、建築物の差別化を図りたい施主は、銘木集めや装飾にこだわるようになります。

木材の伐採・運搬・集荷・出荷や建築の設計・施工の分業化、運材・製材の技術革新、木材の規格化・商品化は互いに影響しながら進行しました。資源状況により、建築に使われる木も変化しました。その時代背景には貨幣経済や合理化思想の進展がありますが、これらが建築のカタチにどのような影響を与えたのでしょうか。

司馬遼太郎の著書のなかに、次のような言葉がありました。
「室町期に、茶室を中心に発達した数寄屋造りが、盛んに行われてから、杉が主役になったのであろう。」

今の日本の住宅建築は、数寄屋造りの系譜をひいている。杉の軽身ともくの美しさがよろこばれて、天井板や欄間に使われたり、たるきや床柱に使われてきた。強度などよりも

装飾的に杉がよろこばれたという室町期の美学が、四百年以上にわたって日本建築を支配しつづけているのである。室町期の美学の偉大さに感じ入ってしまうが、逆にいえば、後世の不勉強といえなくもない。こんにち、杉中心の数寄屋建築好みに対抗しているのは、民芸風の造りーあまり成功した例を見ないがーぐらいのものではないか。」

樹と民家

大平のような、山村の民家はどのように建てられたのでしょうか。

都市部では江戸期からすでに木材製品の流通が活発でしたが、山村で家を建てるときは地場の材料が使われました。施主は自分の持ち山や村の共有地から木を切り出しました。雑木林の中で、梁に使う樹、柱に使う樹を残しておいて、普請のときに使ったのでしょうか。スギ、ツガ、マツ、クリなど多種多様な木が使われました。

山持ちである施主と大工さんは密接に関わっていたのではないでどうか。大工さんに、自分の裏山の木を見てもらい、梁や柱にする木を決め、必要なものを必要なだけ伐っていましたはずです。伐った木は、農閑期に村人総出で出します。

火事で焼けたようなときは、見舞普請といって、親戚や近所の人が良い木をわけてくれる所以、以前より立派な家が建つこともありました。地方では大工さんと施主と村人が共同で、山から建築現場まで多様な仕事をしていたのです。

ところが、戦後、山村でも、裏山は素材生産業者に売って換金する。そのお金で必要な材木を買い揃えるようになります。裏山のスギを売って、九州のスギやベイツガで家を建てるような場合も出てきます。木材価格が下がるにつれ、家を建てるために裏山の木を伐ることさえなくなります。子や孫のために木を植えることもなく、家のローンだけ残す。裏山には手をつけず、地球の裏側の木で家を建てる。そんな時代になりました。

地方で製材工場ができるのは明治以降です。最初は施主や大工さんから頼まれたものを貢加工していたのでしょう。そのうち製材工場は、施主や大工さんとは関係なく山の樹を買ったり市場で丸太を仕入れたりするようになります。そして既製品を製材するようになります。施主と大工さんの関係も変化してきます。施主は大工さんを直接雇って（来てもらって）完成まで日当を支払っていました。ところが、ご承知のとおり今は工事費の中に組込まれています。

木も大工さんの仕事も凡て商品として取引されるようになりました。

樹の商品化

集成材をご存知でしょうか。木片を接着剤でくっつけたもので、体育館や木橋など大断面の建築用材や長押など化粧用造作部材として利用されてきました。

ところが、最近、並柱の代替として構造用集成材柱の生産が急増しています。大壁構法では柱が見えないので無垢材を使う必要はありません。構造用集成材は狂いがなく均一な部材です。まだ柱が中心ですが、梁など横物の生産も増加することでしょう。

プレカット加工材は在来木造住宅で扱う材の4割を占めるに至っていますが、プレカット工場でも、ここ2~3年の間に構造用集成材を扱うところが増えています。今まで国産材比率の高かった在来木造住宅の分野でも集成材使用比率が3割を超え、スギと比肩するまでになりました。構造用集成材の柱は限りなく工業製品化した商品です。林野庁も、構造用集成材の普及は間伐材の需要を高めるということで、いろんな面で支援しています。しかし、私はとても不安です。構造用集成材はプレカットとセットになって大幅にシェアを伸ばすことでしょう。そして、伝統的な建築分野にもいろんな影響を与えるでしょう。

間伐材が構造用集成材に利用されるとは限りません。企業はグローバルな競争社会の中で、世界中から安い素材を集めてくることになるでしょう。

合理化の行きつくところを見極める必要があります。日本的一部の製材工場がバブル期に規模拡大と近代化を進めました。しかし、国産材だけで1万立方メートル以上生産する製材工場は、工場の立地や仕入れ、それに販売面で相当背伸びをしています。特に製品の販売は大手の住宅メーカーが取引先になります。大手住宅メーカーも住宅坪単価引き下げのためには、部材の仕入れ価格を抑えたり、安い部材に切換えたりせざるをえません。このため大規模製材工場は大変苦戦しています。そこに、新たな競争相手である構造用集成材工場の出現です。

既製品市場は買い手市場です。結局、木材製品価格は、世界で最も安い原材料価格が基礎となり、それに連動して無垢の製品価格も下がり、立木価格も下がります。安くなることは家を建てる側にとっては結構なことですが、何十年も樹を育てた山の人にはつらいことです。

世界の森林浴

現在、日本の木材需給率は、建築材で33%、合板で1%、全体で20%です。一体、木材はどこからきているのでしょうか。

構造材は主にアメリカ、カナダ、ロシアです。合板材はマレーシアとインドネシアです。最近はソロモン諸島からも入っています。紙の原料となるパルプやチップは米・加のほかにオーストラリア、ニュージーランド、チリ、中国などです。フィンランド、スウェーデン、オーストリア、ドイツからは集成材ラミナ（芯に使う木片）が、ガボン、南アフリカ、赤道ギニア、カメルーンからは化粧用合板用材が輸入されています。

使い捨てのコンパネはマレーシア、家の土台はアメリカ、集成柱の芯がオーストリア、

梁はカナダ、垂木はロシア、洋家具はアフリカ、箪笥は中国、ドアはインドネシア、家について世界の森林浴が楽しめます。読書はチリの紙でどうでしょうか。

FAOの報告では、1990-95の5年間で1260万haの熱帯地域の森林が減少しています（東京都の面積は20万ha）。熱帯地域での森林の減少は非伝統的火入れによる収奪的農地開発で、商業伐採が直接原因ではないとはいわれています。しかし、商業伐採がこれらを誘発し、熱帯地域の森林や相手国の生活文化に大きな影響を与えていたのは事実です。

木材輸出国は、自国の資源（自然）を切り売りすることで外貨を獲得しなければならないという事情はありますが、輸入国である日本は、その貴重な資源を単なる使い捨ての「商品」として浪費していないでしょうか。

新たな場面

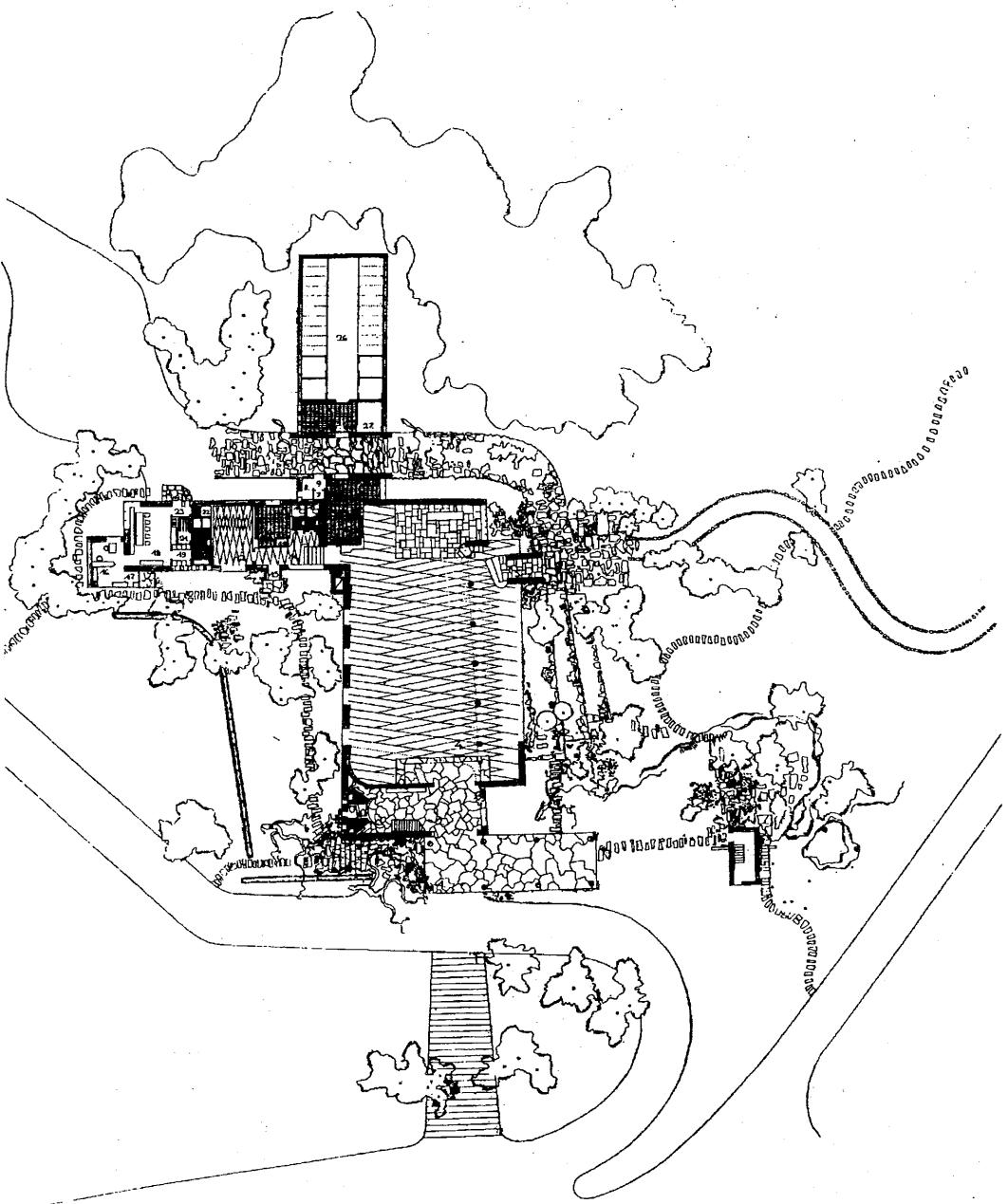
プレカットや構造用集成材の出現は、木材を「工業製品」でかつオープンな「商品」に変えています。以前は、各流通段階において、経済的な繋がり以外に木材に対する知識の伝播が行われていました。取引先のニーズに合わせた仕入れや産地情報の提供などです。ところが、木材の工業製品化に連動して、取引先同士の繋がりは「価格」だけになってしましました。取引関係の合理化を進めた木材製品市場など従来の流通機構は、皮肉にも、プレカット材や構造用集成材という新たな商品の出現のまえに、なすすべもなく崩壊してしまいました。

地方の古い民家からは、そこにある素材を用いていかに良いものを造ろうか、そんな大工さんや村人の気持ちが伝わってきます。それにひきかえ、今、世界中から素材を集め、近代的技術を駆使しながら、どうして安っぽいデコレーションケーキのような住宅ばかり目につくのでしょうか。

「山が荒れている」と言われますが、山で働く人の感覚とそうでない人の感覚とにはずれがあるように思います。山で働く人が言う「山が荒れている」とは、森林の手入れをしないために土砂が流れるとか、水が涸れるとかそういう意味ではなく、使える樹が用をなさない。育てた樹が役に立たない。そんな無念さではないかという気がします。

日本は戦後、山の経済的価値を高めるため1千万haにも及ぶ人工林をつくりあげました。このことの善し悪しは別として、300億本の樹が、戦後、祖父や親の世代の手によって一本一本植えられ、真夏の草刈などを通じて育てられてきたのはまぎれもない事実であり、この樹は単なる「商品」や「工業製品の部材」ではないし、また、そうなってほしくないと願っています。

生活分化同人 飛山龍一



生闘學舍

—法が生み出した建築—

高橋 俊和 (高橋木造建築研究所)

生闘學舍について、なにごとかを語ることはとても難しいことです。少なくとも私にとっては荷の重いテーマです。生闘學舍と出会って20年近くが経とうとしていて、今なら何か書けるかもしれないとの思いで原稿依頼を受けたものの、やはり重いものは重い。

そこで考えました。

何が難しいのか、何が重いのか。それなら書けるかもしれない、と。

そこではじめに、どんな人たちが建てたのかということを知つていただくために、次の詩を紹介します。生闘學舎建設の中心となつた高野雅夫氏、当時24歳の時の詩です。

十七戸垣 — 三十二年
一切左振り切つて上方。
户籍も、学歴も、身寄りもなく
上野の地下道、山谷下ドヤを駆々……
サド・イチマニグ・磨き、バタヤ呼込み、焼きイモ屋
いろはかるた、はじめて自分名前を書く!
二十二戸 — 昭和三十七年三月
戸籍立作り、やつと日本人になる
生かしてはじめて学校の机に坐った。
生かしてはじめて差別のない社会を知つた。

二十四戸の中学生

高野 雅夫

タカノ・マサオ

本当のことは誰も知らない。

昭和十四年十二月二十五日生?

父の名も、母の名も

俺は知らない。

六戸垣 — 二十一年夏

父はすでに戦死していた?

俺は知らぬ。

六戸垣 — 二十一年夏

生闘學舎のことを知らない方もいるでしょうから、そのプロフィールもご紹介します。

生闘學舎は、1980年度の建築学会作品賞を受賞した建物として知られています。設計者は高須賀晋氏。伊豆七島のひとつ三宅島にあり、島の棟梁・宮下英雄氏の製作指導のもと、1960年代からの公立・私立夜間中学運動や、全共闘運動をやってきた人たちが建て主となって、基礎工事から木工事、屋根工事にいたるまで、そのほとんどを自力建設したものです。

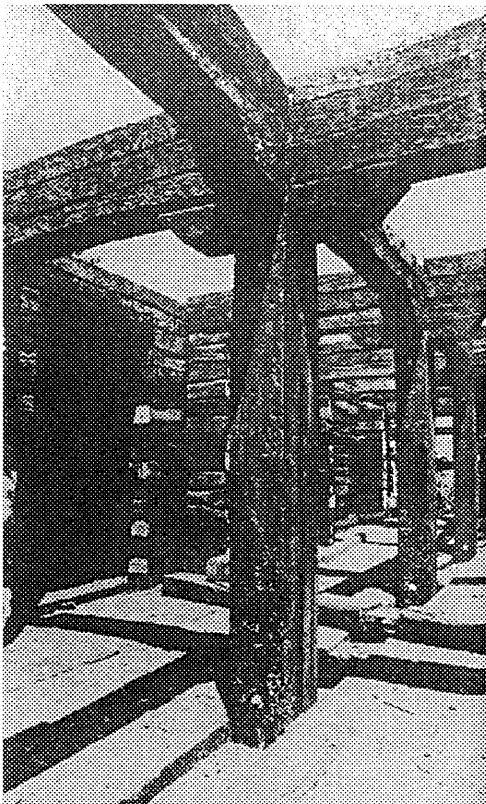
用途は「次代の子供たちのための学校」。1975年6月に着工し、1980年2月に竣工しています。RC造の基礎に、延べ床面積199.26m²の木造2階建てで、構造材から造作材、そして屋根材までのすべてを使い古しの鉄道枕木5000余本を使って造られています。

時々、この建設に関わったのかと聞かれるのですが、それはありません。私は竣工後寄贈されて現在建築学会の研修施設になっている「棟

梁に学ぶ家」の建設とその記録をまとめた『木造伝統工法－基本と実践』(彰国社)の製作メンバーの一人として宮下英雄棟梁に師事し、木造建築を学びましたが、「棟梁に学ぶ家」と引き合わせてくれたのが、それ以前から自主講座運動を通して関係のあった生闘學舎でした。ですから生闘學舎からは大きな影響を受けていますが、直接その建設に関わったわけではありません。

ただ、鳥のヒナがはじめて接したものを親と認識してしまうのに似て、何の建築教育も受けたことのなかった私にとって、はじめて出会った建築が生闘學舎であり、原点といつてもよい存在となっています。それにしても、はじめてその建物を目にした時の印象は今も忘れられません。何かが心と体に染み入ってきて、次々と刻印され、細胞がひとつひとつ入れ替わっていくような、あんな体感感動はその後味わったことがありません。

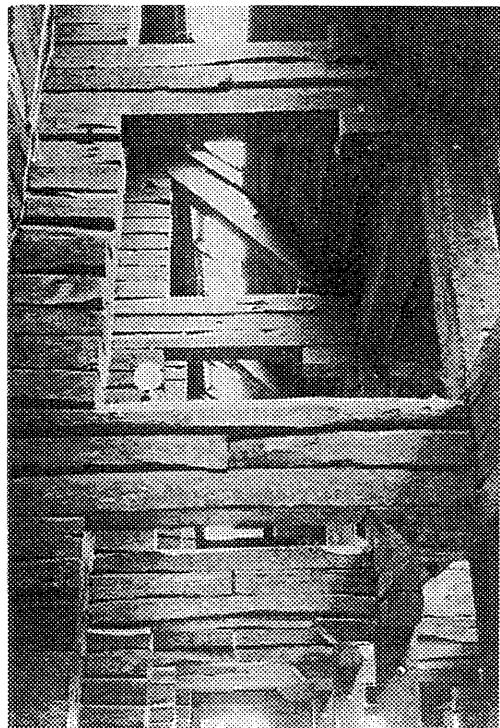
もう絶版になっていて、古本屋でないと手に入らないと思いますが、『敗者復活戦・生闘學舎建設記録』(修羅書房)という本が82年に出されています。少し長いですが、その中から当時中学2年生(14歳)の高野生君(高野雅夫氏の長男)が書いた一文を引用します。



古代の遺跡にも似た工事中内観

『この五千本にもおよぶ枕木はいったいなぜ積み上げられたのだろうか。現在から五年ほど前に大工仕事などまったくやったこともない、人間に対する考え方の違う十人ほどの大人と高野大君そして僕は、その時までにそれぞれがやって来た運動の敗北から再び立ちあがるため、自分たちの自立の学校をつくろうと東京・三宅島へと上陸した。そしてまず初めに「学校建設」をするための原則として「考えが主で建物は従」と決めた。それは我々「家を建てる」ということに関してまったくの素人が無事家を建てるためには、どうすれば五体満足な家を建てるための共同作業ができるかという法則を創らなければならぬからだ。またその原則は、人間に

対する「考え方」の共同作業が成り立たない十人の人間が、この「学校建設」の眞の目的である、どうすれば敗北から再生できるかという法則を創り出す「考え方」の共同作業の場を、現実として結果に現れる「学校建設」におき、かくして自力更生を目指す旅はスタートした。しかし現実は、建設現場での共同作業どころか団体生活の基本である早起きにはじまる、掃除・炊事・酒・タバコ・日曜休日などの、さまざまな問題をめぐり男と女の対立が起き、子供は常にその犠牲となり共同生活すら成り立たなかつた。そしてさらにマイナスはマイナスを呼び、土台のステコンの失敗、ひとりふたりと仲間達との別れ、またそれに追い打ちをかけるように降り続く島の強い雨。もはや全然身動きできなくなつたその時我々は、歴史の必然としかいいようがない出逢いを人生の「師」とめぐり逢うたのである。それは島の大工の棟梁・宮下英雄さんであった。「師」は我々に、「お前たちに建てるんだという想いがあるかぎり必ず建つ」と言ってくれ、土台に使う鉄筋の加工や仮ワク造りを教えてくれ、そのおかげで土台は見事に完成し、枕木を使う工事に入った時は「素人だからこそ手をぬくな」と、枕木の積み方を最高に堅固にするため「アゴ」という加工方法や、枕木と枕木のズレを防ぐ「ダボ」と呼ばれるクサビを、建物をまっすぐに建てる為もっとも重要な「真ズミ」のだし方で何十日も作業が進まず我々がもめている時には、枕木を使いほんの数



内部吹き抜けを見上げる

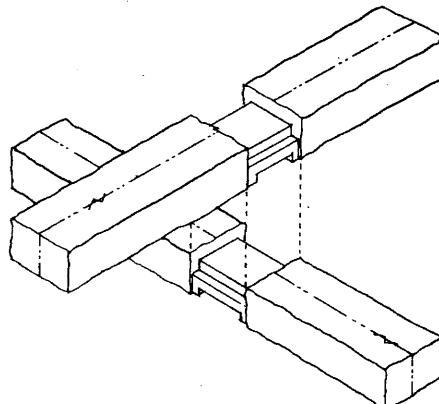
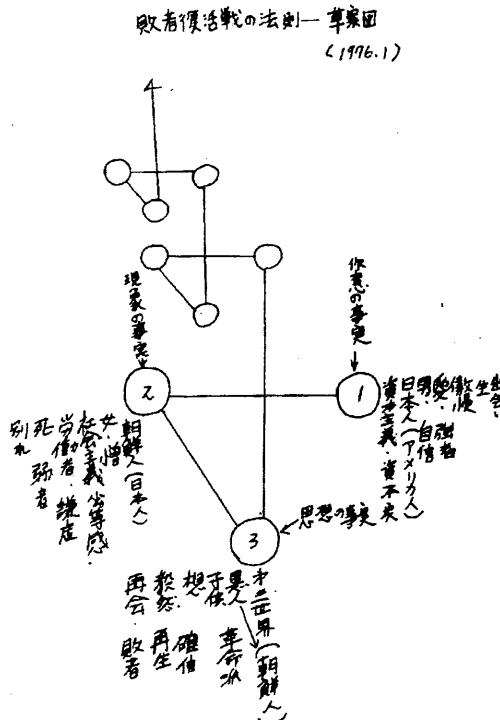
十分で「スミ台」を造ってくれ、そして建物のメインである屋根をどうふくか苦しんでいる時も「素材を生かせ」と「トントンぶき」という、枕木を長さ39センチ、幅平均12センチ、厚さ12ミリに製材して、三枚重ねでふくという方法を教えてくれた。「師」の土着の思想、すなわち島という条件にもっとも適した造り方と、ある素材を十分に活用して最高のものをつくるこの考え方はまさに哲学であった。』

文中の再生のための法則は、「敗者復活戦の法則」(図参照) = 人間の歴史の中の敗者に基準をおいて人間の自立をめざす「コヤシの思想」と名付けられていて、その「検証と発見」の場が「学校建設」だったということです。

建築にいたる経緯、目的と用途、手段と方法、自然環境、人と社会の関係、プロセス、素材、構造、技術、意匠、思想…。それは、どの断面どの部分をとってみても、単独のものとして切り離すことのできない全体性やつながりの中で息づいています。

特に素材についていえば、糞尿にまみれ、風雨にさらされた使い古しの枕木は、安い装飾や構造、小手先の技術を拒否する素材です。実際に木を扱う者からみれば、否、そうでなくても、無数の小石や砂、釘や鉢が食い込み、ねじれ曲がり、裂け目の入った重い枕木は、とても材料としての木とは認めがたいものです。

そんな材一本一本を、伝統工法の組み手のひとつである[合欠き渡りアゴ](図参照)を徹底して使って積み上げていったその工程は、木造のそれではなく、石積みの砦か、ピラミッド建造の姿に



設計者の指示した仕口「合欠き」はじめこの方法で作られたところもあったが、隙間が多く、はさみ込んだ枕木の木片で作ったパッキンも「枕木の重量に押されて飛び出しちゃった」ため、現実的ではなかった。

近いものであるように思います。また、その一本一本は彼らにとって、累々と堆積された歴史、葬り去られた者たちの屍だったのかもしれません。生闘學舎がピラミッドにも似た墓を連想させるのは所以のことではないと思えます。

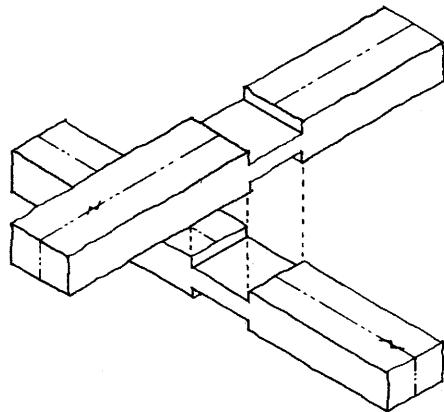
——近代の流れの真っ只中にいて、それぞれの要素を分離細分化させ、全体として軽く、希薄になっていく方向性とは異なる、<質>や<核>というものを感じさせる——などといかにも解ったようなことを考えてしまう自分が一方にいて、しかし建設記録を読み、実際の建物を目の当たりにすれば、そんな傍観的なキレイ事は吹っ飛んでしまい、言葉をなくしてたたずむしかないので

今から十二、三年前、「棟梁に学ぶ家」の作業打ち合わせを生闘學舎の中でおこなっていた時に、こんなことがありました。ほとんど出向いて来るというようなことのなかった宮下棟梁がなにかの用事でめずらしく生闘學舎を訪ねてきたのですが、その時玄関先ですぐには要件を言わずに、無言でしばし宙に目をはせたあと、やさしくその手の平を枕木の壁に当てて止めた後、今までに見たこともなかったやさしい眼差しで二度三度とゆっくりさすりました。静寂の一瞬の後、我に返ったようにいつもの眼光の鋭さを取り戻した棟梁は用事を済ませて帰っていましたが、ほんの数秒の間棟梁と時を分かち合った無言のたたずまいは印象深く記憶に残っています。

言葉を失い、ただ触れて想いをはせるしかない建築がそこにありました。そして、私たちはこの建築とどう向き合えるのか。まだ荷の重いテーマなのです。

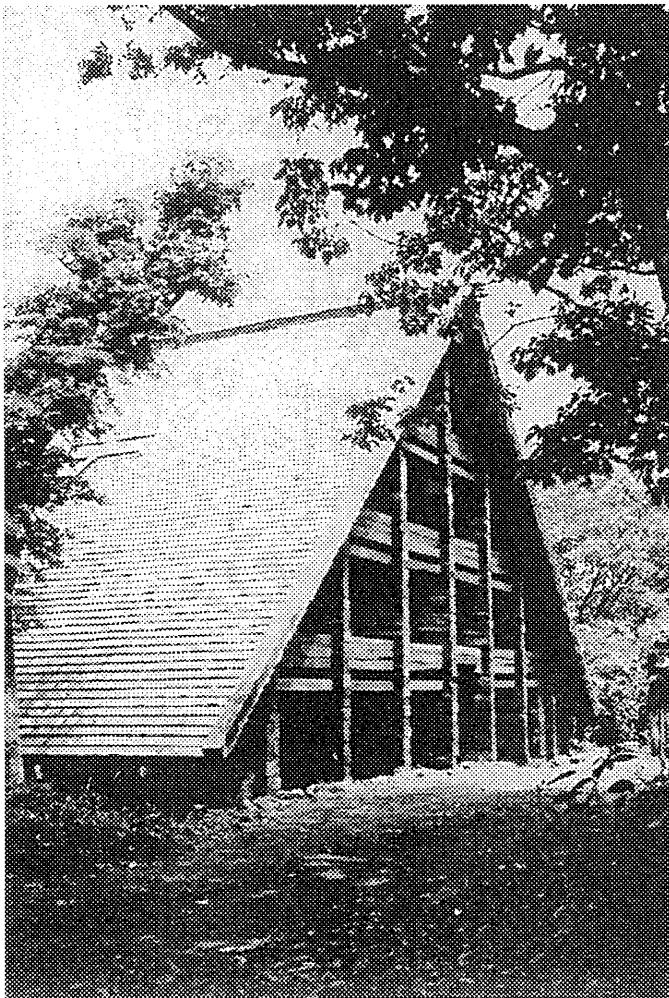
生闘學舎は竣工後二人の子供たちにその想いを引き継ぎました。『ヒストリーズラン』という雑誌の名を記憶されている方はいらっしゃるでしょうか。高野生君(19歳)と大君(18歳)の兄弟が中心となって、85年にマガジンハウス社から創刊された雑誌で、「リング無き十代のための」、「歴史を切り開く十代のメッセージマガジン」として出され、話題になりました。当時はまだ十代ということもあって、「若者たちの神々」といった取り上げ方をされた時もあったのですが、商業出版社内部の対立から第2号で廃刊となってしまいました。しかし、その後自費出版という形で5号までを出し、創刊準備号を加えると6号を世に送り出して十代を終えています。

生闘學舎のその後と今については知りません。屋根を杉皮葺きに変えたという話は聞き



棟梁の提案で実際に施工された仕口「合欠き渡りアゴ」
加工の手間はかかるが、「どうやって組み合わせたのかと思う程仕上がりが良く」、強度もあり、「水止めもいい。」

ましたが、それ以上のことはわかりません。しかし、私の中での生闘學舎は建築をしていく上での羅針盤的存在として常にあり、意識するしないに関わらず私の中の礎石となってきたことは確かです。



生闘學舎・南西面外觀

私の大工見習い生活。

森山ゆき

お元気ですか？ 大変ごぶさたしております。私は大工見習い3年目になりましたが、なかなか食み込みが悪いわ、気はきかないわ、どうなられてばかりで、毎日自己嫌悪です。どんな仕事でも、他人の身になって考えられれば

もっと気が回るのになあ…。まあどうやられている内
が左と思ひ早く仕事を覚えたいたい

…!! 屋根
トタンシ皮ナフ

母屋本リ90×90
木下：米松 115×150

野地：エコボード
厚さ12mm.

梁米松 115×240

既存住居外壁

ガレージ
だけと
折置組

またすみつけから
やらせてもらう
チャンスか
やてきました！

くつ石をすそに
ガレージのわきの
コニクリを
補充したり。
初めて土木
みたいな
ことも
体験

柱
オク
120
×
120

筋違金物が
イマイテだなあ…
といいましたが
立合もないんで
こういう案になりました。

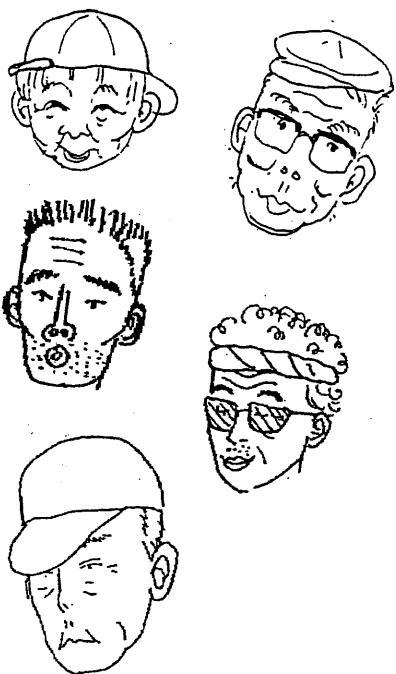
筋違箱金物

くつ石135

GL

⑥月に完成了ガレージ

一緒に働いている大工さん
1人1人が“個性”って
大変面白いので紹介します。
お茶の時間は政治・経済
から、工口言葉・バカ言葉まで
ホントに色々な話が出て
楽しい！みなさんも10時や3
時に遊びに来てみて下さい。



コワイけど
とても人に
あたたかい。いや、
あたたかすぎ...
ありがたや、ありがたや

私の親方



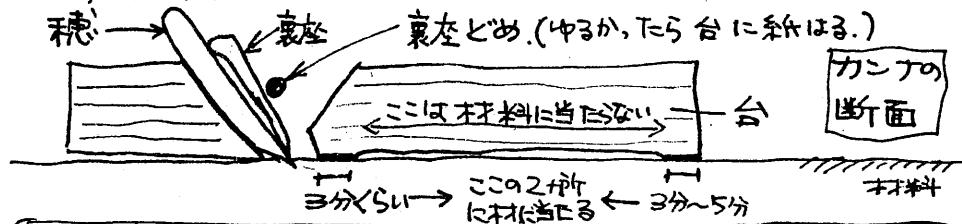
ちょっとここでカンナの使い方

プロの大工さんはこのページ(ほとばし)してもらって「カンナを使つたことがない」という人に、ちょっと紹介します。

このページを読むと、結構わかるよ。

カンナはすぐ使えるというわけではなくて、きちんと使う状態にするには、いくつかの条件をクリアしていくかなければなりません。

穂 → 裏座 裏座止め(やるか、たら台に糸をはる。)



皆で直そう。台が悪いとカンナはず出ない!!

刃が「銛(ミリ)」に研いであれば

いいわけではありません。

台が悪いければ「台無し!」(失礼!)

仕上げカンナは上の図のような形になり

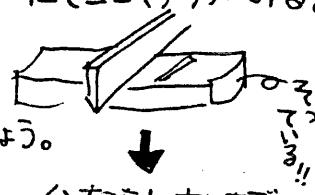
ます。台の下バはまっ平ではありません。

あとそりやねじれもあつたら直します。
時々チエックしよう。

下バ定キ(下バ定木)をあてて、
スキマの光の流れ具合
で、ねじれ、反りを
チェック!!

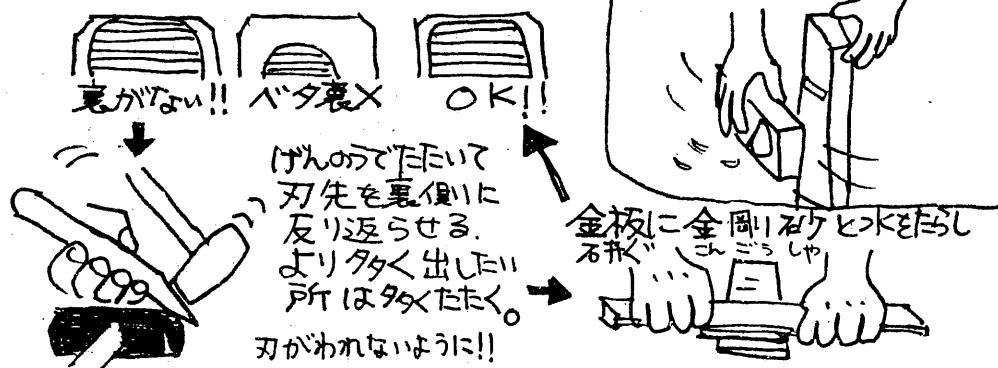


たてヨコ、ナメみる。



台ならしカンナで
直します

刃の裏返すぞ!



あと、



が広すぎると刃のカドにけずりくずがつま
てしまうので、グライナーでつまらない中
に（実物を見て下さい。文で書けない）
けずりとて下さい。

裏を出したら、

穂と裏座をフィットさせよう！

穂と裏座の刃先をひつて
密着させないと、穂と裏座の
間にけずりくずがつま、こぼ
ります。

銳利さは練習と、ヒ石次第。

刃の表を研ぎましょう

やとここまでこぎつけました。
仕上げカニナの刃先は



丸すすてもX。
けずれる巾が
せまくなれば
ます。

まん中か
へこんでいるた
もちらんダメ。
耳が立ちます。
(けずったあとの段差がつく。)



まっすぐだと
ほじっこがちょっと
へこんでいるのが
ベスト。

刃を台にセットしよう！

まづ穂から
こねが裏座。
と中まで
入れる。
裏が穂からとび
出さないように!!

微調整は
刃の出しを
見ながら。



重ねてくつげ?
等。

見て、スキマか
あったら光がれます。

スキマ

こんな風に
片方スキマが
あく

そしたら裏座の、

ミ

こうの
カドをたて
て、折れ曲
がりを高くる

スキマがなくなるまでこれを
くり返す。

おおきに言つて絵と
丈で言ふのは

かなり苦しい。

知らない人は

色々あんだなあ

と思ったかもしれない
でおね。ケバカヤロー!

こんなやり方じや
タメだ!!』という方は

ぜひアドバイスを

お願いします!!

民家・町並みの保存と再生（第21回町並みゼミ 分科会の報告）

記録 日影良孝

写真 伊藤秀夫

民家の集積を歴史的町並みとするなら、単体としての民家と、その集積としての町並みは、保存と再生に関して共通の問題を持っている。保存を、文化財的な意味で、最も完全な姿としてとらえるとすれば、復元として凍結的に保存することになる。単体としての民家にはこの例も多いが、この方法では、もはや住むことはできなくなる。

町並み保存は、現実に住み続けている町を対象とするため、凍結的保存することができないので、凍結的保存を静的保存と呼ぶのに対して、動的保存の概念が必要とされる。動的保存は、建物の外観は歴史的形態として保存するが、内部は現代生活に適合するよう、改変してもよいとする方法、と考えられているが、日本の伝統的木造建築においては、この方法は殆ど不可能なのである。単体の民家を、最近建てられている住宅よりも、格段に優れた居住性を持つ家として、再生させている実例が多くなってきた。これは、外観を保存、内部は現代的というような皮相的なことではなく、商品化してしまった現代の家づくりに対するアンチテーゼとして、日本の風土に立脚した、本来の家を創造していると見て良い。したがってこの再生は、新築をも対象に含むことのできる、保存の概念を越えた、普遍的な論理へと拡大する。町並み保存が住んでいる町を対象とするならば、単体としての民家再生が到達している、こうした普遍的論理を必要とするであろう。これはまさに、新しい町づくりの論理となるはずだ。

この分科会は、民家の再生に取り組んでいる人達と、町並み保存や町づくりに関わっている人達との、共通の広場を提供するものである。そこで論議が、既に実務の段階に達している町づくりの内容を、確実に高めることができ、新しいネットワークがそこから誕生することができれば、と願っている。

浅草は、戦災によって昔の姿を失っているけれども、浅草寺の門前町としての、小規模な店が立ち並ぶ、下町的な情緒を感じる庶民の町である。

この分科会は、浅草寺に残る数少ない歴史的建物を会場とする。庭園に面したこの書院は、廻り縁を巡らし、欄間には彫物、天井は折上格天井で、江戸的な豪快さのある建物。通常は使用できないが、浅草おかみさん会の特別の肝いりで使うことができた。したがって、会は畳に坐っておこなう。分科会の前後には、浅草寺を散策する時間もとっているので、東京ではもうここしかない庶民の町の賑わいにふれてみてほしい。夜の懇親会は、そばの美味しい「十和田」を買い切っておこなう。「ふりそでさん」は京都だったらさしづめ「まいこさん」のこと、若い美人揃いだ。これも浅草おかみさん会の肝いりでのこと分科会に大輪の花をそえてくれると思っている。

吉田桂二先生の分科会大会レジメ用原稿より

白熱したワークショップ

五つのテーマ「目的」「継承」「生活」「技術」「創造」

ワークショップGの五つのテーマを民家・町並みの保存と再生における「目的」「継承」「生活」「技術」「創造」とした。この五つのテーマを各グループごとに、意見交流しその成果を発表しあう。五つのテーマは連動するものであり、切り離すことはできないものであるが、もつれた糸をときほぐすように、それぞれの意味を再考し、民家・町並みの保存と再生という、人々の繋がりまで含めた美しい一枚の布を織るためのきっかけにできればいいと考える。

当日の分科会レジメより

参加人数 117名

当日のスケジュールは、以下の様な三部構成とした。参加人数は117名以上となり、他の分科会の参加人数と比較しても圧倒的な人数であったと思う。

- ・一次会　　自己紹介と昼食　ワークショップ
- ・二次会　　浅草の自由散策
- ・三次会　　「十和田」にて懇親会。

当日のワークショップは参加人数が予想よりも多かったため、約120名を六つのグループに分けた。グループにはリーダーを選任しそのリーダーに各グループの進行をお願いした（突然の選任で申し訳ありませんでした）。

リーダーは、以下の六名。

- 1班・植久哲男氏（住宅建築編集長・東京）
- 2班・柴田純男氏（設計工房クレヨン・福井県小浜市）
- 3班・戸張公之助氏（戸張建築設計室・東京）
- 4班・永見進夫氏（永見建築設計室・愛媛県松山市）
- 5班・八甫谷邦明氏（建築思潮研究所　造景編集室・東京）
- 6班・降幡廣信氏（降幡建築設計事務所・長野県松本市）

総合司会（外国語ではワークショップの司会をファシリテーターと呼ぶらしいが、どうもこの言葉に馴染めない）は吉田桂二先生と日影良孝。

議論できる時間は12時から16時まで。このたった4時間で「目的」「継承」「生活」「技術」「創造」の五つのテーマを話し合うことには無理があったが、まとめることは最初から目的としているので良しとする。

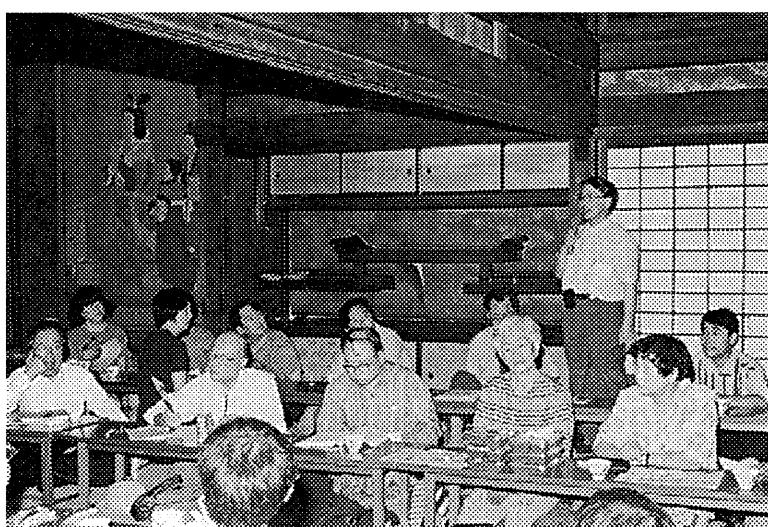
参加者の意見（ポストイットカードの言葉より）



目的

○自分の住む地域、そこで生活に対する誇りを持つことそれが文化の始まり、そのひとつの手段としての町並み保存・再生がある。○まさに民家や町並みの保存と再生にはハードとソフトの二面性という事から考えられる。ハードには日本のその地方の古き良き歴史、伝統建築の保存や再生、利用のしかた、暮らし方があり、ソフトにはハードを支える技術の継承が必要である。○そこに住む人、家族、地域の人の生き方、考え方の具象化、アイディンティティーの具象化

としての民家・町並みの保存と再生がある。○良い人間、優しい人間になるため、つまり「モノ」は大切にしなさい」とか「思いやりのある人になりなさい」とか。○歴史、文化を伝える。住む人、訪れる人に不快感を与えない。○伝統的な技法は、先人から受け継いできた財産だと思う。今は後継者難が深刻だが、保存修復によって細々とでも技法が伝承されていけばと思う。○人としての「感性」の開発を目的とする。○全国どこでも同じ町並みのはずがない！各地の特徴を残してほしい。○くつろぎが有るけど守るのが大変です。○お役所の若い係員が勝手に町名を同一化した事は非常に残念、また旧名に戻しつつある処もボチボチ出てきた様ですが。○歴史の記憶として、建築単体および町並みを残していく必要がある。○生
活していく上で心の豊
かさ、ゆとり、はげみ
等のために保存再生し
ていく必要がある。○
その集落が、あるいは
町並みが存在していた
歴史的役割によると思
いますが、その役割を
現代に蘇らせ、できれ
ば学術的ばかりでなく
生活の場として生かせ



る（観光との両立）のが大切だと思う。○目的そのもの、何に惹かれるのか。○そこに住んでいる人とそこを訪れる人の感覚の違いがあると思われます。○私は日本人らしく生きていきたい。それが唯一の目的です。



継承

○時代がにじみでる生活を継承。○歴史、文化の継承。○技術者が誇りをもてる仕事をつくる。○無理な継承はしない。○民話、民家芝居などが行われるような舞台として保存していく。○核家族による生活形態の変化に

よって草むしり一つもできない状態。たとえ近代化されても（台所など）民家における生活を継承していくのは難しい。○技法、材料などの継承についてデザインの問題があるのでは。ふるくさい。○暗い、寒いを明るく、暖かく。住み易い方法を探る。空間の転用と発展を考える。○人々の暮らしは本来継承しながら発展するもの。町や建物はそうやって豊かになっていくもの。この30年から40年の産業の急激な変化の押しつけが生活の継承性を危うくしてきた。継承発展の豊かさを取り戻そう。○旅をしてきて魅力を感じるところの、ほとんどが、過去のものを継承したものである。建築における創造は周辺の環境により制限されるものである。○身体で継承していきたい。

生 活

○日本の本来の生活を取り戻す事を考えた時、どの時代に立ち戻ればよいのか？それに対して明治以後のものは和的ではないのか？○旅をしていつも考え込んでしまうのは、みんなもう少し歩いて暮らせないものかということです。通りには車が歩いているのに、町に人影がないのは寂しいです。○町屋には町屋の生活様式がある。例えば囲炉裏、天井が高いなど、しかしごく一般の現代生活にはあわないものがある。○古い建物は傷み、老朽化が進行しているものが多く、生活面では大変な部分もある。補助事業では修理しても予算の枠がありなかなか手がつけられないものも多い。冬場の寒さをしのぐためにアルミサッシュを入れたがる住民も多いが、外観上に関わる使用は制限せざるを得ない。（アルミサッ

シユってそんなに良い建具なんでしょうか？木製建具では本当に対応できないのか個人的に知りたいのですが、あまり関係ないのですか？）景観として見た場合、土道がどんどん消えているところがある。せっかくいい家並みが残っても自動車の為に土道はすべて撤去されてしまいました。住民の生活の改善方法なのでしょうが、複雑な気持ちです。○民家の生活はまさに若者の生活に適応する、美しい生活である。

技 術

○内子では特に指定の業者はいない。内子は職人のまちと言われている。○大工さんでも良い仕事をしたいと云う人は多いがその腕をふるう場所がない。○外材が主流、材の種類をわかる大工さんがいない。○古い民家や町並みを残す事が技術を残す事につながる。○日本の技術の価値を低くしてはならない。○ツーバイフォー神話はおかしい。伝統工法を踏襲すればOKということではない。○金物は木よりも早く腐る。○公庫基準は伝統構法を知らない人がつくった基準である。○伝統的に造られた家は丈夫であるという裏付けが必要である。○伝統構法には限られた優れた、突出した大工さんのみに受け継がれる特殊解ではなく、何でもない、町場の大工さんにこそ受け継いでもらいたい。○生活の技術の継承が最も大切だと思う。

創 造

○施主側に建築の勉強をしていただく必要がある。よい大工さんがいて、良い施主がいて、建築に理解を示していただき、○木に竹を接ぐのではなく、伝統の中に見合った新しいものを。○再生=創造か？○時代の流れの中で○新しいものではなく古いものを守ることも大事。○戦後洋風なものが一般化してしまった。ハウスメーカーの思いつき。新しいモノが伝統ではないのが今の問題点。伝統を引き継いでないのは、本当の町づくりではないのではないか。我々日本は伝統的な集落に立ち戻ってスタートしても良いのではないか。○古い家を直す時、その人の想像力やセンスが現れる。造り手の想像力がとても重要である。

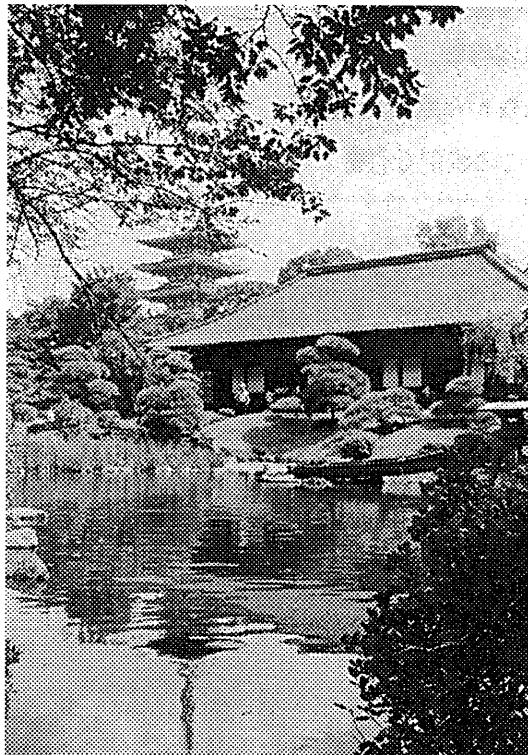


町並みゼミが終わって

日影 良孝

町並みゼミの目的は様々ですが、その目的が理想的な？町並みをつくることに主眼を置いているとしたら、その理想的な町並みは何？と問い合わせられても僕はいまだ、うまい言葉やかたちを答えることはできません。町並みは動くものだから、そのカタチだけを考えても、不足しているようで、実際に存在するのは人であるわけですから、町並みは「人」がいれば成り立つものであると単純に考えることもできるわけです。と同時に美しい町並みを欲する気持ちは誰もが持つ絶対普遍的なもので、その普遍性には個人の主観も相当量含まれてきます。そのように考えると町並みゼミは「ひとなみゼミ」と言い換えたほうが良いのかもしれません。人はまさに時間の蓄積の上に、歴史の上に存在しているわけですから。

私たちの分科会の目的は、まさに「ひとなみゼミ」を開くことにありました。現実の時間の流れに抵抗することが町並みの創造ではなく、時間の流れと共にいかに時間（まちなみ）を創造できるかがこれから課題ではないかと考えたのです。時間の創造は個人的なものかもしれません。故に、その個々の言葉にお互いに耳を傾けるのに意義があるのでないかと思ったのです。



(ひかげよしたか)

神戸復興住宅再考

岩崎 直子

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災発生。いままで多くの人々が語り、書き記してきた「その日」のことを思い返してみる。当時私は大学1年生で、被害の大きかった神戸市灘区に下宿していた。悪夢の続きを覗いているかのような激震のあと、静まり返った中で隣の木造アパートで何かが割れ落ちる音が続いた。瓦だった。おじさんの怒声が響く。朝なのに空が茶色かった。そのうちやっと、地震が起きたのだということがわかった。

午前6時になる前に広島の実家に電話をし、無事を伝える。服とコートを着込み、窓を開ける。異様に静かだったことを覚えている。幸い下宿は被害は少なく、外に出ることは容易だった。外に出てみて初めてことの大きさを知る。道路になだれ込むように家が倒壊している。近所の暗いままのコンビニに人が殺到している。原付に乗った大学生が道路に散乱した倒壊物を避けながら走っていく。人はたくさんいるのに、何か静けさが支配していた。友人の無事を確かめようと思い、何も持たないままふらふらと歩いた。それ違う人々は何かさっぱりとした面もちだったように思う。むしろ無事であったことに対する喜びと、目の前に広がる非現実的な光景に興奮しているようでもあった。まだこの惨事を惨事として認識する事が出来なかったのであろう。歩き回る人々にまぎれながら、不思議と絶望感はなく、それよりもこの状況を目撃し、記憶しておかなければということだけを感じていた。

友人の下宿の大家さん宅で余震におびえながら一晩過ごした次の日には、友人と共に大阪へ出ることができた。神戸から東へ3時間歩いた西宮市の駅から電車が出ていたのである。大阪ではいつも通りの生活が続いていた。マクドナルドで食事にありつける有り難さを感じながら、隣に座っている小奇麗な人々をみると地震は本当に起ったのかと戸惑いを感じた。神戸から避難してきた人々と大阪の人々とのギャップがそれほどにあったのだ。まるで神戸で起ったことが遠い外国でのことのようだった。

私の震災の体験は、ここまでである。その後無事に広島に帰るが、新聞や報道で神戸の様子を知るたびにすぐに避難してしまった後ろめたさと、電車の音を地震の音と聞き間違えてしまうことに悩まされた。3月に再び神戸に戻るまで、じわじわと甦ってくる地震の恐怖と、神戸でするべきことがあったんじゃないかという葛藤を感じていた。今でも

それを思うことがある。なにか大事なことを見逃してしまったんじゃないかー。

ただ言えることは、「震災」がまだ続いているのは確かであるということである。

阪神・淡路大震災から4年がたち、神戸はその間めまぐるしい勢いで変化を遂げた。三宮周辺の市街地を見れば、新しいビルが建ち並び、地下鉄の新設工事も行われ、震災があったことすら忘れかけているような勢いである。けれども一歩離れて住宅街を見ると、いまだ仮設住宅が建ったままの公園（今年中に撤去さ

れる予定らしい）や住宅の隙間に残る「立入禁止」の立て札のたつ空地、そして同じようなファサードをもつ家々が並ぶ。震災後、この粗雑な風景を作り出してしまったものは何なのか。そしてそこからもう一度表情の豊かな町並みを作り出せる可能性を見いだすことができないだろうか。ここでは私が大学の研究室で復興状況の調査を続けている神戸市東灘区の住吉という地区を通して、学生の立場からみた震災復興の印象を書き連ねてみよう。断片的ではあるが、何かを感じ取っていただけたらと思う。



写真1 ほぼ無人となった仮設住宅

住吉地区は区画整理や再開発などの面的整備事業が適用されず、行政上の支援がほとんど期待できないいわゆる「白地地区」である。つまり、まちや住宅の再建が個人に任せられているのである。当然そのような地区においては、まちづくりのルールができるのを待つというような悠長なことはできず、住宅の再建が可能な宅地から順に進んでいった。そして、未接道宅地や狭小宅地は取り残されたまま、空地となって住吉地区の中に点在している。

そういういた敷地は共同化という方法で建物の敷地とし利用される可能性はあったものの、宅地に関する権利関係が複雑で、その解決策や調停役が見つからないまま放置されているのが現状である。そのような空き地が住吉の中であちらこちらに目にし、花壇や菜園など

庭として利用されている他は、ほとんどが駐車場として使われている。(写真2)



←写真2 駐車場として使われている空地。粗雑な印象が残る

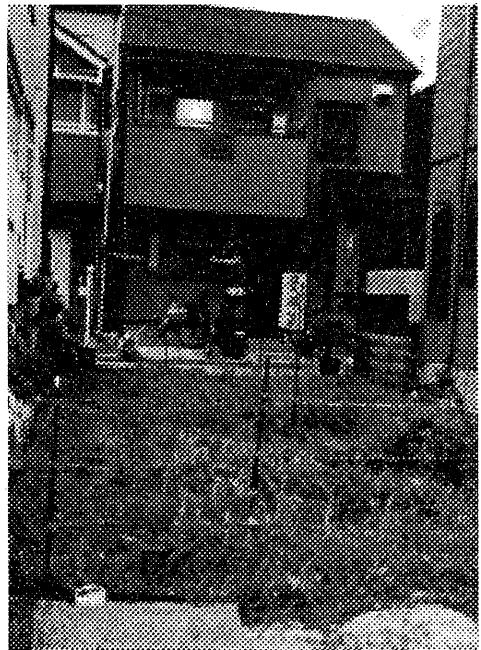
↓写真3 「立入厳禁」の立て札の立つ空地。ロープが張られている。

あるいは写真3のように、ロープを張って立入禁止にされている空き地もみられた。(でも、実際は人は通っているようで「けものみち」ができていた)

このような空き地は震災の跡を見せつけられるようで、街の雰囲気を左右させる存在であると思う。放置されている空地を考え方を変えて一時的にポケットパークにするなど、うまく使うことで町並みを豊かにしていく可能性を持っていると思う。

震災前に住吉に住んでいた世帯で、震災後に戻ってきたのは約3割だといわれている。つまりその他の世帯は、新しく住吉地区内に新しく住宅を確保できた世帯か、住吉地区内の親族の家に同居することになった世帯である。

震災後に再建された住宅をみると、4、5軒似たようなファサードをもつ住戸がならぶ



通りが目に付く。(写真4、5)これはミニ開発によって1宅地が細分化され、分譲された戸建住宅群である。それらの多くは1階が駐車場をとった3階建てである。こういった通りは表情が硬く、すこし不気味でさえある。植木鉢を並べるなどのあふれ出しが行われて個性が表れ、豊かな町並みを形成するようになるのはもう少し先の話だろうか。



写真4 同じファサードが並ぶ。開口部
が異様に少ない。

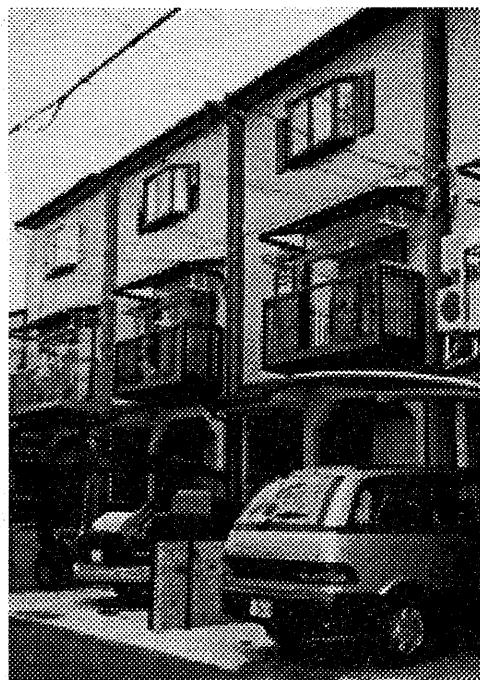


写真5 写真4よりはまだ人間味があ
る・・・?

ハウスメーカーによる住宅群が住吉の中でも多いのは、工期が短くすぐに住むことができるといった利点も一因となっているのであろう。そういう住宅をよくよく観察してみると、表札が2枚ある戸も結構目に付く。(写真6)この住宅は前面道路に対し2世帯がそれぞれ玄関を設けている。



写真6 表札と玄関を2つ持つ住宅

このような多世帯同居は、震災前は神戸市近郊に住んでいて、震災をきっかけに同居した息子あるいは娘世帯である場合が多いということが調査・研究によって分かっている。

このように、多世代・多世帯住宅が震災後に増え、再建された住宅には、2つ並んだ玄関がついているものや、1階、2階にそれぞれ玄関が付いて外階段でアクセスするものが目立つ。(写真7)もちろん、住民側の様々な家族形態に対する要求を全て反映したという住宅とは言い難く、今ある戸建て住宅に無理矢理住んであるのが現状であろうが、地震後、このような住宅が多く現れたのは事実である。今後多様な家族形態に対応できる住宅が望まれるであろう。

住吉地区を歩いていると、玄関が2つある住宅の前で花の手入れをしているおばあちゃんと道行く人々が言葉を交わしていたり、写真4・5のようなファサードの並ぶ住宅の前の道路が子どもの遊び場になっているのを目撃した。何の縁か、私も住吉地区に住む小学生2人に家庭教師についている。以前、その生徒と住吉を歩いていると、道行く大人がみんなその子に「どこいくん?」と声をかけていくのだった。(100m歩いて5・6人は声をかけていた。)近所づきあいとは縁遠くなっていた独り暮らしの私としては、とても新鮮な体験であった。



写真7 階段アクセス型の玄関を2つ持つ住宅

地震で1度は家も人の縁もバラバラになったであろうが、人々の生活は続いているし、コミュニティが失われず持続していることを感じた。地震後もつづけられている住吉のだんじりが何よりの証だろう。町中の人人が集まつてもりあがるこの5月の祭りには、私も含めた学生も参加させてもらうことができ、この町の人々のおおらかさとバイタリティーを感じた。震災によって1度は失われ、ものすごいスピードでできあがった町並みも、少しずつでも手が加えられ、この住吉の人々によって個性のあるまちになることを願う。



写真8 住吉のだんじり。町内を練り歩く。

茨城県のすまい

外岡 生帆

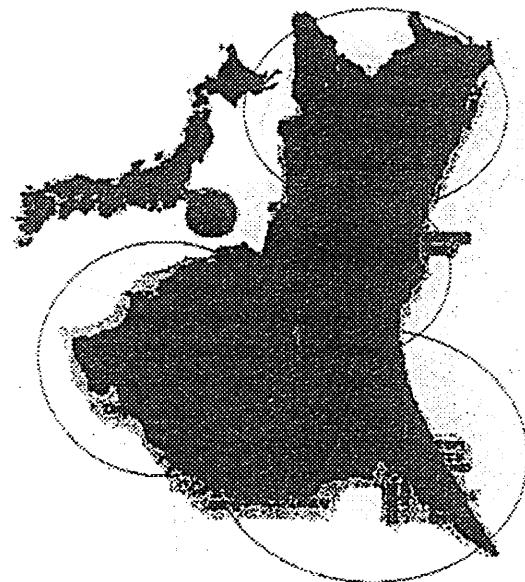
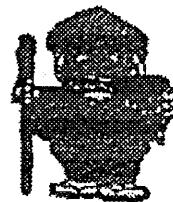
と、いわれても…。って言うくらいしっかりとした観点から見たことはなかったです。ごめんなさい。

ただ、なんとなく、好きな風景があつたり建物があつたり、人柄が好きだったり、そんなふうにながめていました。自分が生まれ育った土地だから好きだったわけではありません。どちらかというと、小さい頃は田舎の親戚の家に行くのが嫌いでした。1人でお泊まりなんて大嫌い!寂しくて寂しくて…。

そんな時を思い出せば、今、どんなところにもプレハブ住宅なる物が出現しているのもわかるような気もするのですが…。

私が生まれ育ったのは茨城県でも県央に位置する県庁所在地の水戸です。ここは徳川御三家という歴史に終止符を打つことが出来ないまま、だらだらと大名商売をしている悪評高い商人の町なのです。不幸にも第二次世界大戦で町は火に包まれ全てを失ってしまったのでした。唯一面影を残していた「町の名」までも、最近捨ててしまいました。

新しい住みよい町に生まれ変わろうとしている努力もあります。水戸市の中にある千波湖周辺は湿地帯です。今は、そこを公園にして市民の憩いの場としています。

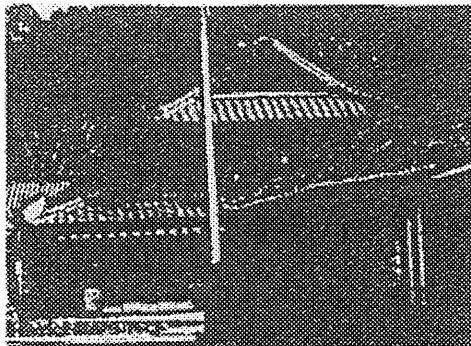
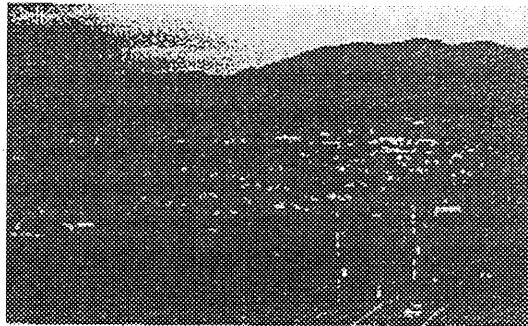


たぶん県庁所在地でこれだけの緑地を保有している所は少ないでしょう。(犬を車に乗せて散歩にくるし) 散歩が十分に出来、海にも山にも近いこの街は、都市的な生活は半減しても生活しやすい四季や自然からの恵みである幸の食べ物も美味しいだけの事を考えれば、とても生活しやすい事でしょう。

まあ、私が住んでいる水戸はこんなところですが、茨城県を地域で分けると県南、県西、県央県北の4つに分けることが出来ます。この4つの地域の自然的条件(大きな気象条件の違いは見られないと思いますが….)によって生活の仕方、住宅の特性は違ってきてているような気がします。

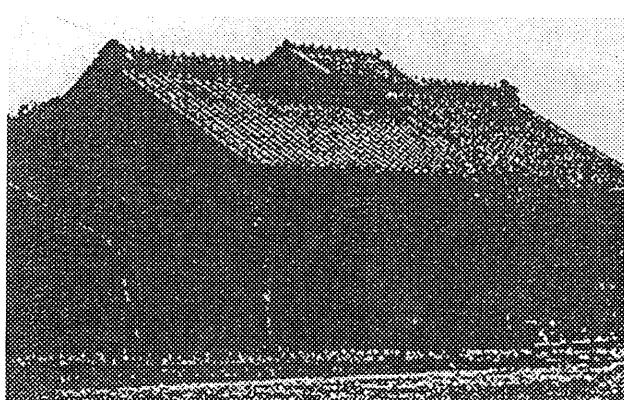
今回はちょっと県北へ…。

県北方面は関東平野をはずれ、福島県栃木県の山々に囲まれた地域に近い雰囲気を持っています。穀物を耕すには十分とはいえないこの土地では、蕎麦やこんにゃく、煙草を作っています。山間には久慈川や小川が流れ緑深い静かな方が流れている地域です。



自然の中で生活していく手段を考えいく人間にとて、雪深くもないこの地方は山間でも割と手こずらずに生活していくことが出来たことでしょう。そのためか、建物にはそれほど大きな特徴が見られるとはいえません。ただあたりまえに人と一緒に存在している…。

ここに、ある。という事実しかないので。なぜか、その必然性が美しく、そして愛しく思えるのです。

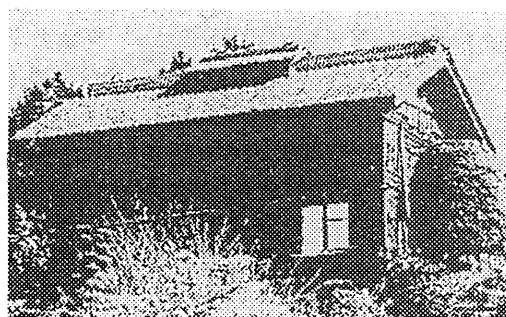


この風景の中に数年前青いアンブレラーが出現したのを覚えている人もいるでしょう。

とても鮮やかなブルーが田畠の中や小川の中に点在していたのです。

この時、私の中の何かが変わっていきました。

とても寂しく、けして豊か?とは思えなかつた風景が色を持ち、ときに愛しく思えたのは、この同じ形をした同じ色のアンブレラーが沢山出現したからかな…。そんな感じがするのです。



窓のとり方や越屋根の形、決められた形を持っているわけでもなく、その家に必要なように建てられた煙草乾燥小屋。

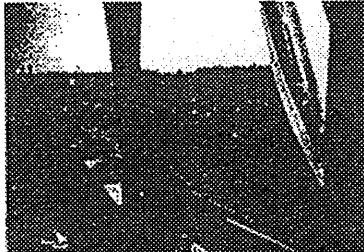
今は、使われていない物も多く、この凛とした姿がこの風景から次々と姿を消していっているのです。

はてしない大空が、甍の線で分けられている。

青い空が甍の波で海となる。

手のとどかない空と現実である地上との境界線。

夢見てやまぬ大空に屋根は一等近くにいる…。



とても空が青い日、
瓦の間からのぞけた空は私だけのものでした。

屋根にあがるのは、自由への道なのかな…。

そう、私の好きな場所。

最後に…。

数年前、水戸市郊外の那珂川が遠くに見渡せる丘陵地に「みんなが集まれる場所」を、「溜まり場」を考えてもらいたいと茨城大学の先生から言われました。

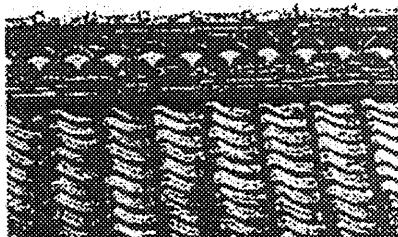
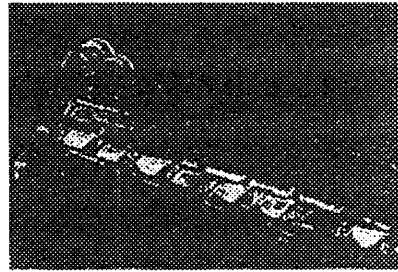
その先生は生涯学習（もとは社会学の先生らしい）を教えていました。茨城県内の様々な人達とふれあい、地域や生活をいろんな角度から見て、考えて、勉強している、とても人の輪（和）を大切にするあたったかい先生でした。「僕の家」というよりみんなで車座になって話ができる溜まり場がいい。そして、ここに来た人達が茨城を感じてくれることができれば言うことなしだよ」と。茨城を感じてくれれば？

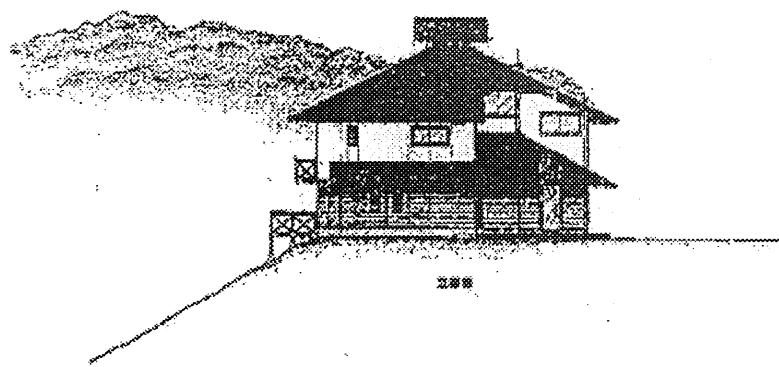
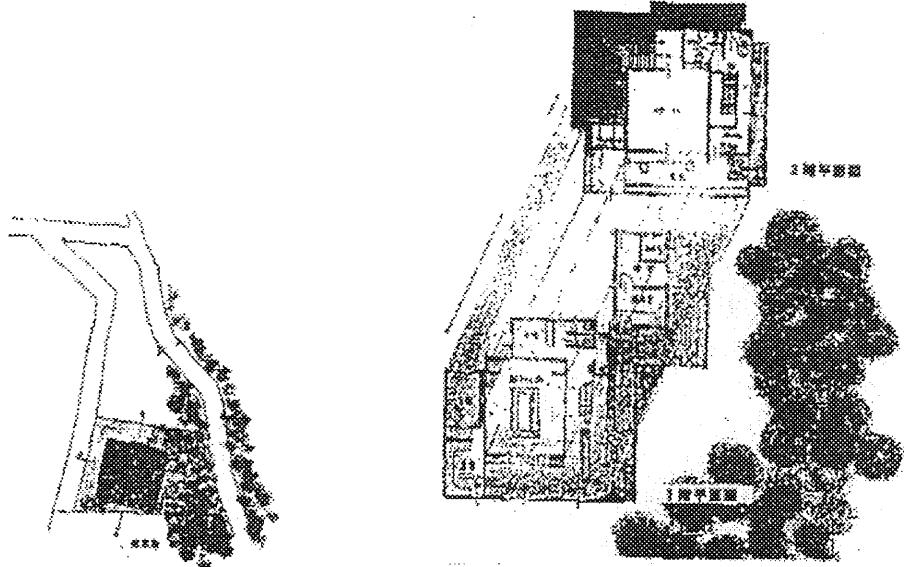
それは、私にとっては大きな問題でした。う…ん。地場産の材料を使うこと？それも大切だと思うけど…。と、頭のなかはぐるぐる状態。もともと頭なんて良くない私。気が付いたら頭で考えることはできなくなってしまいました。そして、いつの間にか先生の気持ちを心で感じるようになったのでした。

先生の気持ちがその溜まり場に写し出され、そして、茨城の人達もきっと他の地方の人達と同じように、おいしい野菜が採れたと言っては隣に持つて行ったり、祭があるといつては順番に廻ってくる当番の家に集まつたり…。いつも家族以外の誰かが土間で、はてには座敷に上がり込んで一時を共にしていた場面が一つの空間として生まれることを願って鉛筆をとってみました。ちょっと調味料として笠間焼きや稻田の御影石、結城の紬、西の内の和紙は使う事を考えましたが主人公は作らず、みんなでハーモニーを奏でる事にしました。

残念ながら、様々な困難があり今だに存在しない溜まり場となっていますが、先生の強い思いが続いている今では、その誕生は季節が変わるがごとくやって来ることでしょう。

誕生のときにはお酒もって遊びに来て下さい。トトロのような先生が待っています。





素 敵 な 人 々

岡 部 知 子

陶芸家猿田さん一家

都心から程よく離れ1.2時間かければ都内への移動が可能な割には駅から少し離れると、沢山の山々やまだきれいな川など自然に満ちた町、埼玉県飯能市。そんな住み心地のよさのせいか、ここ20数年間に沢山の芸術家たちが住みつきました。木材の町のためか、木工家はもちろんのこと、陶芸家も随分と増えたように感じます。

ほとんどの芸術家は個性的です。親しくおつき合いをさせて頂いている猿田さん御一家も個性のあふれた方たちです。そして私の一番好きな陶芸一家です。

お人柄はもちろん、物づくりの姿勢が大好きなのです。

猿田さん御夫婦には子供さんが三人います。そのうちのお二人、息子さんと下のお嬢さんを含め4人で陶芸に取り組んでいますが、それぞれが違う作風なので、並んでいる作品を見て誰のモノなのか想像するだけでも楽しいです。

陶芸家としての名前が世間に知られ、有名になっていくと仕事も忙しくなってきます。世の中のすべての陶芸家たちがそうではないでしょうが、単一のものを50個100個と注文すると自分では作らずに、下請けに出すという事がこの世界でもあるらしいです。しかし、この一家はけしてそんな事はしません。必ず仕事を受けた人が、手を動かしてくれるのです。

お世話になった方たちのためにと、まとまった数を期限をつけてお願いしても「今〇〇ならその日までに出来ます」という返事「それでは〇〇さん、お願いします」と打ち合わせに入れます。

たとえ家族の中でも御主人の看板で受けて、子供にやらせて自分が作った顔をして納めるなんてことはしません。経験が多くても少なくとも個人の存在を大事にしている、嘘、偽り、ごまかしのない物づくりへの姿勢なのです。

今、物づくりという視点でいうと、自分でも仲間と家づくりをがんばっています。そして常々思っているのが、同じ様な姿勢なのです。



自分や家族の誰かに家づくりの相談や依頼があった時、例えば設計者や工務店に丸投げしてしまうのではなく、その人たちに相談をしながらもそこで自分は何をしなくてはいけないのか、何ができるのか考え、最後までかかわりをもっていきたいと思っているのです。

それは、素材屋、設計者、施工者とそれぞれの立場によってみんな違うはずですが、それをしっかり考えてこそ、頼られ信頼してくれた人たちに対して、責任を果たしたといえるのだと思うのです。

陶器のように小さいものであっても、家づくりのように形は大きなものであってもです。どちらも大きく見れば、物づくりという事には違いないことなのです。作ったものを使ってくれる人に対する気持ちは、同じはずなのです。



猿田さんのところで以前に頂いた大皿に、コップを落として少し割ってしまった事がありました。そのまま捨てるには忍びなくて、かけらを拾って「どうにかなるでしょうか」と持っていました。まったく面倒なお願いにもかかわらず、「こんなのすぐに直りますよ」とあつという間に元のようにくっ付けてくれました。もちろん接着した面の傷跡は残っているのですが、かえってそのお皿に対して深い愛着がもてるようになりました。気に入って買ったわけですが、ただそれだけではない思いがそのお皿に加わったような気がしています。今でももちろん愛用しています。

一枚のお皿にそんな気持を持たせてくれたのは、いい関係でおつき合いをして下さっている猿田さんです。

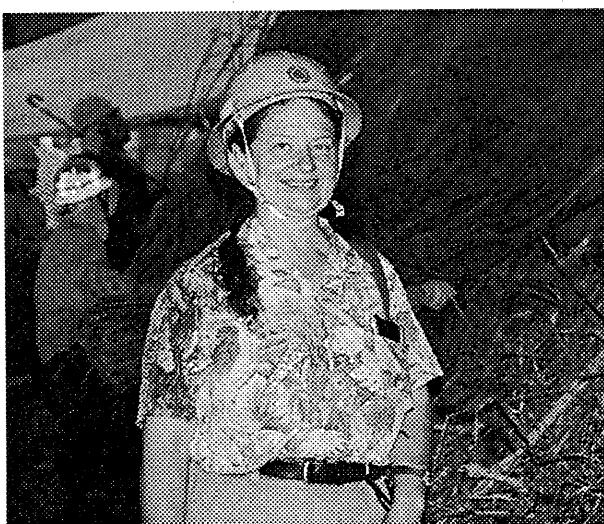
家づくりにおいても、そんな付き合い方が私の理想とするところです。

翻訳家 杉原バーバラさん

伝統技法研究会という会で戸張先生の講義での連続セミナーが行われました。見ると聞きいっている大勢の人の中に、一人の外国人女性が混じっていました。

日常的な会話ではなく建築の専門用語が、それも戸張先生のお話は昔むかしの生活のことから歴史的な書物にまでも及んでいます。私は日本人でありながらも、理解に苦しむ言葉や話が沢山出てきます。「あの外人さんは、熱心に聞き入っているけど、全部理解しているのだろうか…。」そんな疑問も最後には解決しました。

講義終了後の質問の時間に、その女性が手を挙げました。「お話の中の竹で作った天井のことですが…」数少ない質問者のひとりだったのです。



そして、講義終了後の懇親会の席で、同じ時間に質問した私の名前を覚えていたらしく、「オカベさんてハンノウの？」と声を掛けてこられました。

その人の名前は杉原バーバラさん。アメリカ生まれの方でした。

実はお互いの息子同士が、同じ職場に行っている間柄だったのです。どんな職場なのかというと、文化同人のメンバーでもある高橋木造建築研究所の高橋俊和さんのところで

す。そこで二人の息子たちは大工としてお世話をっています。杉原さんの息子さんはそこでの先輩です。

突然の出会いに世間の狭さを感じ、目には見えない縁というもの不思議さを感じました。そして杉原さんの行動力の凄さを感じました。実はこの女性、建築関係の仕事ではなく翻訳をするのが本来の仕事なのです。機内に置いてある月刊の本。日本に来る外国人のために、日本を紹介する記事を書いています。そしてある時、茅葺きの民家を書く事になったのですが、調べているうちに民家に、というより茅葺きと土壁に、ハマってしまったらしい「ちょっと変な外人さん」なのです。

今富士見野に作られている民家園に茅葺き民家を移築中なのですが、そこで萱を葺いている様子の記録を取るために、カメラ片手に駅から40分もかかる場所なのに歩いて通う程エネルギッシュな人なのです。

バーバラさんは茅葺きの魅力に取り付かれてしまったわけですが、建築には特別興味が

あるわけではないと言われます。しかし、探究心のある人なのでこの先の建築とのかかわりが、どんな風になるのか楽しみですが、それはさておき、茅葺きとの出会いは2年程前飯能の隣町の高麗家住宅の屋根の葺き替えが始まりだそうです。それからは屋根の葺き替えの話を聞くと飛んでいって、記録を取っているのです。

通っているうちに、葺き替えを行う中心人物は何処へいっても高齢者で、この先、技術が伝承されていくのか不安を感じたと言われました。それできちんと記録を残したいと思うようになったそうです。なんだか頭をガーンと叩かれたような気がしました。日本生まれではないバーバラさんに「日本の文化をもっと大事にしなさい」といわれた気がしたからです。

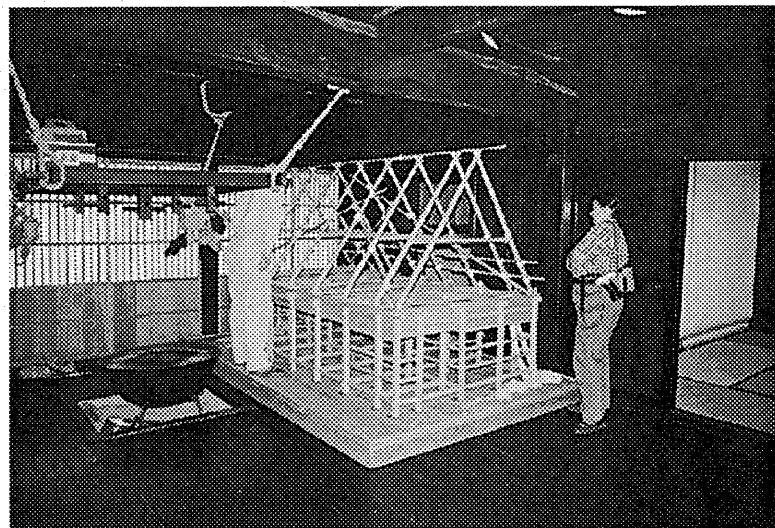
撮った写真は1000枚以上「まだ撮りっぱなしなんだけれど、とにかく撮れる時に撮らなくちゃね」とバーバラさん。これを纏めて本にしたいと言われてますが、何の後ろだても当てもあるわけではないのです。写真代も出かけた足代もすべて自費で賄っているのです。

「杉原奨学金が家から出ているのよ、子供もみんなお金が掛からなくなってきたいるし」とそこはアメリカ人らしい楽天的な気持ちの持ち主でもあります。

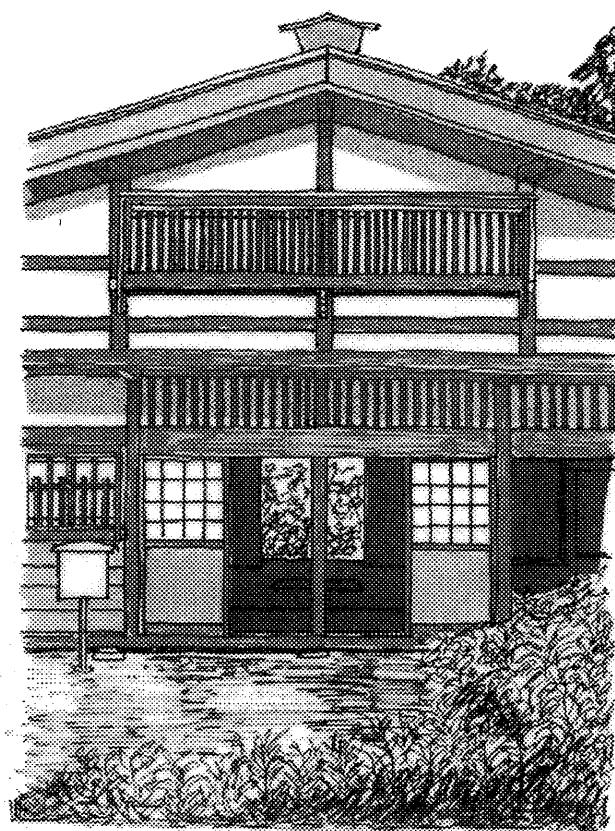
それは本物とは何なのか、日本という事を考えてのものなのか、疑問視したくなるような家づくりが横行している現在です。絶対に無視してはいけない気候風土を考え、納得のできる家づくりを目指したいと思っている私としては、日本人として襟を正してこれからできる事を、しっかり考えていきたいと思います。

バーバラさんには三人の子供さんがいるが、家庭内の会話は全て日本語だそうです。言葉は文化だし、日本に来て結婚したのだから、あえて英語は教えなかったと言われました。英語苦手の私としては勿体ないと思うのですが、「日本人と同じ教育で英語には触れさせれば良い」と判断したという徹底ぶりです。

日本人より日本を意識し何を大事にしていかなくてはならないのかを考えているバーバラさん、私にとっては意識のお手本のような人に知り合えた事に感謝感激。



大平建築宿分科会からのレポート (1998)



1994
大平建築の今とこれから

「地域文化の自然感」

レポーター：長谷川 修 記録：江原 幸壱
サポートー：江原 幸壱

◇冒頭にビデオを上映する

「よみがえれアイヌの知恵 ー中本ムツ子さんの生活ー」

中本ムツ子さんは、週2回アイヌ語教室でアイヌ文化を伝承しているカムイユカラの語り手である。中本さんは祖母のカナパンさんからアイヌ語を学んだ。8年前までドライブインを経営していたが、現在は一人暮らしである。中本さんが教える千歳のアイヌ語教室は北海道全体で14カ所ある教室の一つで、7年前に一般人向けにできた。

中本さんには幼少のころ、辛い出来事があった。アイヌであるがためにいじめられ、父が買ってくれた帽子を取り上げられ、捨てられたことがある。そのためにアイヌであることが嫌になった時期がある。アイヌは劣った民族であると書いてある本もあった。そのころはアイスクリームと書かれた看板の字を見るだけでもピクピクしていた。

アイヌ語を伝えようと思うようになったのはきっかけがあった。結婚して札幌で暮らしていたが、5年前に夫と死別し、故郷に戻りドライブインを始めた。そこに集まってくるアイヌの仲間と語り合う内にアイヌの考え方が好きになってきた。それから改めてアイヌ語を勉強し始めた。白沢ナベさんから多くのことを学んだ。現在は山に出掛けたり、料理をする中で、孫にアイヌの知恵や歌を伝えている。珍しい山菜が手に入ると、料理をして孫を伴って、先祖供養に出掛ける。いっしょにもっていった団子を箸で崩し、団子の魂を先祖の世界へ送ってあげる。

言い伝えられているアイヌの教えがある。

「老人も赤ん坊も神に近い存在なので、ともに敬うべきものです。」

「この世に役割をもたないものは何一つとして存在しません。たとえ人間に害になるものでも何かの役割があってこの世に存在するのです。」

「真の豊かな者とは食べ物でも着るものでも他の人に分け与える心をもつ者です。」

現在、中本さんは脳に動脈瘤があり、いつ悪さをするかわからない。しかし、中本さんにとって死はこわくないという。あちらの世界では先祖や親が暮らしているから、と。

◇長谷川さんへの質疑応答

Q：アイヌの人たちはアイヌという言葉をどのようにとらえているか。

A：アイヌとは人間という意味である。アイヌであることをいつも誇りに思うというか、考え方としてもっているのは、アイヌという言葉をわたしに語りかけられることが喜びであり、誇りになる。「アイヌ ネノ アン アイヌ」という言葉があり、それは人間らしい人間という意味で、そのように言われることがわたし自身の喜びであり、誇りになる。

しかし、ビデオの中にあったように、日本の国の中で、不幸なことにアイヌという言葉が差別用語になってしまった事実があり、現在もなお残っている。ぼくらが子供の頃に「あっ、イヌが来た」というように、アイヌという本来は誇りある言葉なのに日本人達によって差別する言葉に変わってしまった。

北海道では戦後間もないころにアイヌの長老たちが集まって「アイヌ協会」という組織をつくった。しかし、普通の生活をするアイヌの人達にとって、差別を受けてたこともあり、自分たちをアイヌということに馴染めなかつた。そのようなこともあります、アイヌという言葉を使わずに、ウタリ（同胞）という言葉を使うようになった。これは初めに日本政府が行政主導で行政の言葉として使うようになった。「アイヌ協会」を「ウタリ協会」という呼称に改めて、現在に至っている。2年前に「ウタリ協会」の総会で、新しい法律ができた時点での「ウタリ協会」を「アイヌ協会」に変えようという話が理事会で進められていたが、昨年の総会ではアイヌという言葉を使うことに総意がまとまらず、そのままになった。北海道の場合は日本人にはさほど感じないかもしれないが、アイヌにとってみればアイヌという言葉に差別的な響きがあるように思える。自分がアイヌであると名乗れない状況が現在でも残っている。組織の名前としてすら使うことができない。

差別用語にまつわる事件が10年程前にあった。北大の林教授が「アイヌは人間と犬の混血だ」と、学生にむかって講義の中で述べた。このとき林教授は糾弾され、謝罪することになった。日本の知識人が、アイヌという言葉を、アイヌが誇りにしているにもかかわらず、それを蔑み、差別を助長するようなことを率先して行っている。それは10年前だけではなく、現在の有識者や政治家の中にも存在し、少数者を排除している。学校や行政においてアイヌについてどのような認識をもっているのかを改めて調査すべきである。これからはそれぞれが議論して学んでいくことが必要である。

Q：アイヌは無文字文化であり、口承で言い伝えや歌を通してアイヌの自然感や考え方を伝えたが、日常の言葉として使われなくなったアイヌ語についてどのように考え、これからどのようにしていくのか。

A：私自身は完全に同化されていたので、アイヌ語は親からは教わっていない。だから、子供に言葉を伝えるのは不可能である。北海道の中では各地にウタリ協会の支部があり、アイヌ語教室がある。そのアイヌ語教室の中で言葉は学べるが、札幌で聞いた話によると、講義形式で教室をやっていて、アイヌはそのやり方ではついていけないので、実際は日本

人ばかりの教室になってしまっている。それではまずいので、アイヌ語教室とは別に、ピクニックや山菜を探りに行ったり、料理をしながらアイヌ語を勉強するやり方をするようになった。

アイヌ語は、言語としては田村先生や中川先生のように研究者もいるので残るであろう。しかし、日常語としてアイヌ語を教室で学ぶのは限界があるので、歌や踊り、ピクニックなどの行事を通して身につけようと努力がなされている。例えば、わたしの子供達は「レラ・チセ」で定期的に集まり、ウポポヤリムセを学んでおり、ぼくが知らない歌までよく覚えたんだな、と驚くことがある。言葉を伝えたい、アイヌ語を学びたいという気持ちをそれぞれのアイヌがもっていることは確かである。しかし、どのようなかたちで学んでいくかということは難しいことだと思う。

私自身は以下のように考え、勉強している。昨日はコンサートの前に、囲炉裏にイナウを2本立てて、アペフチカムイ（火の女神）に守ってもらう儀式を行った。他にイオマンテ（熊送りの儀式）などのカムイノミ（神への儀式）がある。時にはわたしもカムイノミの長をするときもあり、それらの儀式の中でも言葉は必要であり、カムイノミのカムイへ語りかける言葉として、日本語ではなく、アイヌ語で語りかけたいと思う。現在はそれを実際に体験することによって、アイヌ語を少しずつ自分の言葉にしていくということをしている。先日、東京でアイヌ式の結婚式が行われ、その結婚のカムイノミはアイヌ語で行われ、結婚の報告とこれからのことをお祈りした。これからはそのようにしてアイヌ語を自分の言葉にしていきたいと思う。

Q：現在、語学としてのアイヌ語の教室は、アイヌ語を話すフチ（おばあさん）の言い伝えや歌をテープに録音して、それをカタカナあるいはローマ字を用いて表記して教える方法をとっている。フチの語った言い伝えの中には、文字としては残されなかった史実があるはずで、近い将来、それが解き明かされるであろう。

自然の中で暮らすアイヌは常にカムイを意識して生活していると言われるが、それについて説明してほしい。

A：アイヌのカムイを日本語で神と訳しているが、神とカムイのイメージが一緒になるというのが不安に思える。私は個人的にはキリスト教を信じており、牧師にまでなった人間である。現在はそれから離れているが、いわゆる唯一神であるキリストを信じているので、人からよく尋ねられることがある。「長谷川さんはキリスト教を信じていて、しかも、アイヌの宗教を信じているのですね」と。その場合、私には説明のしようがない。アイヌのカムイに対する尊敬・思いは宗教ではなく、生活の中での考え方、あるいは生活の知恵だと思っている。カムイは常に身近にあり、私だけでなく、現在生きているアイヌがもっとも大切にするはアペフチカムイ（火の神）であり、常に身近にいるとを考えている。フチがよ

くすることだが、毎朝、ストーブの火を炊くときに、「今日も一日健康で生活ができますように」とお願いする。カムイに対する思いはアイヌならば誰もがもっているものである。表現を代えて言えば、皆さんも人間であるから、皆さんの中にもアイヌのカムイに対する思いと同じようなものを毎日の生活の中でもっていると思う。それは宗教ではなく、山に行けばそこでいろいろなことを学ぶことができるし、人間が唯一のものでなく、自然中で人間がいるのだという考えが当然でてくる。普通の人間が営みをしていく知恵であり、魂であると思う。

私は旭川出身で、カムイコタン（神の集落）が近くにあり、小さい頃よく話していたのは、カムイミンタラ（カムイが遊ぶ庭）があって、そこにカムイが集まって来てワイワイ遊んでいて、人間もそれに誘われ、一緒に参加している。そういうイメージをアイヌはもっていて、常に身近にカムイを感じている。具体的に言えば、私は山梨県に住んでいて、時々、山に登る。そこでカムイノミ（カムイに祈る儀式）を一人でやる。山に行けば自然があり、一つ一つの木も山菜も植物もカムイであるから、そのカムイのそばにいられるという喜びを感じる。このようなことは私の個人的な体験ではなく、皆さんにもあると思う。それを大事にするか、しないかの問題である。それを本当に大事にするのがアイヌの考え方である。

Q：日本人の中にも自然に対する思いはアイヌと同様な感覚があったように思う。

A：アイヌは同化されてきたけれど、一番同化されたのは日本人（和人）ではないか。何に同化されているかは敢えて言及しないが。日本人が素直な人間の姿を取り戻すことがアイヌ以上に切実なことではないかと思う。

Q：文化を維持するのには言葉と共に、自然の恵みを採取したり自然の中で自由に暮らせる生活圏が大事だと思うが、アイヌ新法とからめてアイヌの生活圏について話してほしい。

A：一つ一つの権利について説明すると長くなるので、次のように述べたい。アイヌ文化振興法（略）の中で、アイヌ文化はすばらしいといい、特にアイヌ語を後世に伝えなくてはいけないと謳っているが、この法律はアイヌだけを対象にしたものではなく、日本人も含めてのものである。アイヌ語はフチから親へ、親から子供へ伝えられて伝承される。しかし、アイヌ文化振興法では、アイヌ語は大切であるが、アイヌ民族はどうかについては触れていない。現在、生きているアイヌは北海道には3万人がいるし、東京には5千人が暮らしている。アイヌの文化はすばらしいから伝えなくてはいけないと言い、新しい法律のもとで、文化を伝えようという努力を何億円も使って一生懸命している。アイヌが自分たちの言葉を自分で親から教わって子へ伝えたいという気持ちとは随分ずれがある。早い話、日本人が話すアイヌ語でも、そのアイヌ語を残したいというものである。日本人でアイヌ語を勉強している人達は沢山いる。そういう意味ではアイヌ語は残ると思う。しか

し、アイヌが獲得したアイヌ語がどこまで残るのか。アイヌとしての誇りやアイデンティティを見いだしてそれぞれが生きられる社会が本当にくるのかどうかを考えると、この新法は旧土人法とあまり変わらないのではないか。我々が求めているのは、日本の中にアイヌ民族が生きているということを大切にしてくれということだけである。土地権やさまざまな権利の要求はあるが、基本的には先住民族アイヌが日本の中にいて、そのことを大切にしてほしいということである。実際は、アイヌの人達の生活は実態調査でも明らかにかなり厳しい。特に高齢者の生活は厳しい。中本さんの場合は伝承者ということで特異なケースである。中本さんの様子を見て、アイヌの人達が皆豊かな気持ちで生活をしているのだろうなと思われる人がいるだろうが、そのように思ってほしくない。実際には、貧しさゆえに年金の掛け金を払えずにいて、年金さえもらえない人がいるほど、厳しい状況にある。

Q：旧土人法を含めて新しい法律においても、アイヌ以外の人が勝手に作り、アイヌの人々に押し付けているのが実態だが、これから先、アイヌはどのようなことを求めていくのか。

A：アイヌ新法ができるまでに13年間の運動があった。84年の「ウタリ協会」の総会でアイヌ民族に関する法律案を決議した。その中には参政権の問題もあり、国会での議席も地方議会での議席もアイヌ民族に与えてほしいということを謳っていた。重要なこととして、日本政府は今までの同化政策の補償として民族自立化基金を創設して、アイヌ民族が自立できるように支援することが盛り込まれていた。先住民族としてのアイヌの位置付けも謳っていた。

横路北海道知事は国に対して働きかけようと、懇話会を設けた。その懇話会で3年間議論して報告書を出した。横路知事はそれを法律として国会で決められるような内容に修正した。しかし、それには民族自立化基金も先住民族アイヌの位置付けも抜け落ちてしまった。アイヌ民族の参政権の問題も議論すらならなかった。アイヌ民族が決めたことを道庁が骨抜きにしてしまった。

そして、97年に五十嵐官房長官の発案で国会の中に有識者懇談会ができた。その議論の中でさらに骨抜きにされた。アイヌ民族が決議した84年の法律案では、①アイヌ民族は先住民族である、②北海道旧土人保護法は屈辱的な差別法である、③明治以降の日本の植民地化政策、同化政策に対して政府ははっきり謝罪すべきである、という三点を謳っていた。88年に続き97年で完全に骨抜きにされた。

97年の有識者懇談会4.1答申を読んでいただきたいが、その中で日本政府は歴史的な責任を負わない、と言っている。アイヌ民族のもっとも大きな組織である「ウタリ協会」は、その一つ一つを認めてきてしまった。「ウタリ協会」はどこまでアイヌ民族の総意をまとめたか疑問である。「ウタリ協会」としては、アイヌ文化振興法は民族法である、という立場

である。私は「ウタリ協会」に対して何度も公開質問状を出して、アイヌ文化振興法がなぜ民族法と言えるのかを問うてるが、答えはいつも同じである。そういう議論がこの13年間続いた。その運動の過程で、日本政府の知恵というものが総結集されて、アイヌは自分たちの主張を貫くことができないのだろう、という考えになってしまった。

皮肉にも萱野茂さんが国会議員になったときにアイヌ文化振興法ができたのだが、日本政府の一番やりたかったことは北海道旧土人法を撤廃することであり、アイヌ民族の一連の動きはすべてそれに利用されてしまった、という思いがある。国連常任理事国入りを目指す日本政府にとって旧土人法という差別法が国内に存在していることは不名誉なことである。旧土人法の撤廃は、アイヌ民族に対してどうのというよりも、日本政府が国際的な顔向けとして行っておきたいというものであったと、私個人としては思っている。

私は、最後のこととして、アイヌ民族の自決権を求めている。自分たちのことは自分で決めたいという単純なことである。自決権は皆が意識すべきだと考えている。そこで問題なのはアイヌ民族の中で自分たちで決められる議論ができていないことである。民族問題は百年戦争だと思っているので、それを百年かけても、世代が変わっても遅くはない。残りの人生の中で議論（チャランケ）ができる素地づくりを続けるつもりである。

Q：死語の世界・輪廻というものはアイヌにはあるのか。

A：こちらの世界で死ぬと、むこうの世界で先祖や先に逝った人達と生活しつづけることがある。生まれ変わるとのとは多少違う。カムイはいろいろな姿でこちらの世界に現れる。カムイは自由に二つの世界を往き来している。イオマンテは象徴的で、ヒグマが毛皮や肉を背負ってアイヌのところに来て、それをまたカムイの世界に送り出す儀式である。ヒグマだけでなく、道具の魂を送り返すこともある。輪廻とは違う考え方ではないか。

カムイは神のイメージとは違い、人間的な面もあり、アイヌとカムイが議論（チャランケ）したという民話が沢山ある。

Q：カナダで先住民族の土地権が認められたと伝えられたが、日本ではどうか。

A：世界の先住民族、カナダのイヌイットやネイティブ・アメリカンやオーストラリアのアボリジニが裁判などで権利を獲得している例は、最近、特に多い。日本の場合は少し事情が違う。日本のアイヌの場合はもともと権利はあった。アイヌは北海道旧土人法の中で、給与地として1戸当たり5町歩（約500ha）の面積の土地を、15年以内に開墾しなければ没収という条件付きで、与えられていた。その権利が守られているかは別であるが。他の国の場合にはもともと権利がなく、先祖が住んでいたのでそこに住む権利があると主張して、それが認められた。外国の場合は権利がなかったところでの権利の奪還ということで闘いやすかったのである。日本の場合は給与地という権利があったので、政府としては今さら何をいうか、という論法になる。本来、アイヌ民族は何を主張するかというと、アイヌモ

シリ（アイヌの生活圏）を返してほしいということである。日本人に出て行けという無茶な要求はしない。歴史的に、日本人を引き取って一緒に暮らしていたという事実もあるし、戦後の混乱期に在日の人をかくまったくもある。ただ、日本が植民地化した北海道をきちんととしたかたちで返すべきではないか。

「北方領土」の問題について二つの考え方がある。国際法の中で議論する方法と国内法で議論する方法である。アイヌ民族の立場について、有識者懇談会4.1答申の中にも出てくる資料であるが、北方四島は日本のもともとの土地であるとし、日本政府はアイヌ民族が日本人であることを前提として交渉している。現在ロシアと日本の間で話し合われているが、アイヌも話し合いのテーブルにつかせろと主張している。これはアイヌ民族が日本人ではないという考え方である。どちらの考え方で北方四島の返還を解決していくのか、私としては迷いがある。北方四島をまず日本に返還してもらってから、日本人とアイヌが議論するのが正攻法なのか、具体的には困難であるが、現在の交渉段階からアイヌが話し合いに参加することを主張していくのか。私のとる立場は後者であるが、現実は難しい。

Q：アイヌの住居について解説してほしい。

A（江原）：アイヌの住居はチセと呼ばれ、木と茅や葭などでできている。一家族二世代あるいは三世代が同居していた。他に付属屋として、倉庫、熊の飼育檻、便所がチセの回りに建てられた。樺太・千島ではトイチセと呼ばれる冬の住居があった。半地下で屋根に土をかぶせたものである。明治時代まで使われていたのではないか。

A：アイヌ民族は狩猟民族なので、かつては川を中心に移動しながら生活していた。松前藩が支配してきた頃には狩猟生活は崩れてきた。明治時代以降は労働力としてのアイヌの奴隸化が始まり、住むところは制限され、コタン（村）の形態は崩れた。アイヌの生活形態は2～300年前から崩されていて、チセという形だけは明治の頃まで残った。現在でも白老や二風谷でチセは復元されている。

詳しい情報は、「レラ・チセ」（新宿区西早稲田2-1-19YKビルB1F TEL03-3202-7642）やアイヌ文化交流センター（中央区八重洲2-4-13 TEL03-3245-9831）で入手できる。



第5回大平建築宿 第四分科会「写真」
モデル・床絵美さん 撮影 斎藤 彰



第5回大平建築宿 第四分科会「写真」
モデル・床絵美さん 撮影 近 清武

「大平の川遊び」

インストラクター：羽場崎 清人

サポーター：寺本 雅男

大平宿を挟んで流れている川、黒川と小黒川は天竜川の支流の最上流の一つです。木曽峠辺りを源とする小黒川と古木山（2169m）を源とする黒川は大平のすぐ下流で合流、少し下ると阿智川になり、天竜峡の南あたりで天竜川本流に合流、佐久間ダムを経て浜松市と竜洋町に挟まれて太平洋へ到着。大平から約160kmです。（天竜川は諏訪湖方面からが本流なのでもっと長い距離があります。）

さて、計画では黒川で遊ぶ予定でしたが事前にチェックした結果、幼い子供には足場が悪すぎるので黒川に変更。旧道を下り小黒川との合流点辺りの対岸より川原に下りて、それぞれに水鉄砲で遊んだり川に入って遊んだり、と自由に遊ぶが幼い子には場所的にハード過ぎた様に思いました。もう少し広い川原と浅瀬があれば幼児にも安全に遊べたのですが……。

魚釣りは日中とあって全くアタリも無く中止、羽場崎さんも網で魚を狙うも収穫無し。今度は皆で小さな淀みと浅瀬で川の生物探し、ミズスマシ、オタマジャクシ（カジカ？）アメンボ等を見つける、水中の石の下を探りトビケラ類、カゲロウ類、カワゲラ類の水生昆虫の幼虫数種類を見つける（ヒゲナガカワトビケラの仲間、ヒラタカゲロウの仲間、カワゲラモドキの仲間？等と思うが浅学のため固有名はワカリマセン！）。しかし幼虫類は数が少なく小さい、8月半ばと云う季節のせいかもしれないが第1回建築宿の時（7月後半）から今まで毎回釣りをして、餌として川虫を採取したが幼虫類はすべて小型、少数だっ



（何がいるのかな？）

たので、もともとこの辺りは幼虫類にとって厳しい生活条件なのだろう、だから、これらを主食としている大平周辺の溪流魚の型が小さいものと思われる。しかし、黒川の溪流魚は姿、色合いは素晴らしい。ホントに！

又、川原上空にはアカトンボが数え切れないほど避暑に来ており、9月になれば濃い紅色になって下界へ下りてゆくのだろう。ミヤマカラスアゲハもよく見かけ黒い羽根の中のメタリックグリーンの微妙な色はいつ見ても美しい。甲虫類は気温のせいいか少ない様だ。

そろそろ子供たちも飽きてきたようなので村に引き返し羽場崎さんに持ってきて戴いた青竹で遊ぶ。花入れ、食器、箸、竹トンボ等を作る、竹を切ったり割ったり削ったりの作業を大人も子供も楽しそうに手を動かしている、ついつい夢中になってしまふ、竹を切った時の何とも云えない香りが懐かしい。

いつか、青竹を使っての工作分科会もぜひ開いて戴きたいものです。

大平の自然を浅く広く知るために周辺の樹木、草花、昆虫、等々、身近な自然探検もこれから建築宿分科会で開いて戴ければ、より大平が親しみ易くなるのでは無いでしょうか？。

ただただ集まってのんびり過ごして収穫の無い分科会などとは云えない内容の分科会でしたが、これはこれで良しとしてお許し下さい。



(ワタシも挽けるヨ!)



オオハンゴンソウ<キク科>帰化植物

■生活文化同人会則

●生活文化同人の目的

1. われわれは、自らの建築（オリジナリティ）へと向かうアプローチ（方法論）について互いに研鑽し合う。
2. われわれは、生活文化という視点で各分野の伝統技法に学び、未来のモノづくりに活用する。
3. われわれは、旅を通して固有な地域環境に学び、新たな創作活動への契機とする。

●会員の種類

生活文化同人（以下同人）の会員は以下による。

1. 年会費
2. 会報購読会員
3. 定例会聴講会員

●総 会

年会員によって構成され、年1回以上開催することとする。世話人会においての年間の活動報告等を行うものとする。

●世話人会

世話人会は世話人によって構成され、本会運営に当たっての各種活動方針の決定機関とする。

●世 話 人

同人年会員の中から、積極的に提案、および行動することを原則として自薦、他薦によって自由に本会の運営に参加し、責任を持ち事務局に協力する。その任期は1月から12月の1年間とする。

●事 務 局

事務局は以下の構成による。各担当は世話人会で決定する。

- ・事務局
- ・会計
- ・機関誌編集局
- ・会報編集局

●同人の活動

- ・大平建築宿の開催（1回／年）

- ・定例会の開催（5回／年）
- ・機関誌の発行（1回／年）
- ・会報（生活文化）の発行（隔月）
- ・他ネットワークとの交流
- ・その他

●入会の手続きと会員の特典（平成8年）

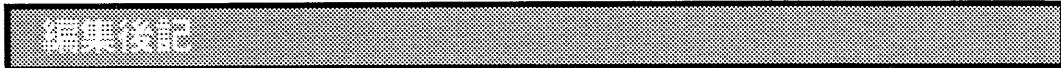
1. 年会員 7,000円：定例会聴講、機関誌・会報の購読
2. 会報購読会員 2,000円：会報の購読
3. 定例会聴講会員 聽講費：2,000円／回（学生割引 1,000円／回）

○年会員・会報購読会員は1月から12月までの年単位とし、中途入会の場合も上記とする。

○年会員は1家族ひとりで可とする。ただし、定例会聴講の場合は年会員でない家族は聴講費（学生割引と同等）を払うものとする。

○会費納入先 郵便局 総合口座 10010-54101181
生活文化同人代表 吉田 桂二





京都の学芸出版社から『新・町並み時代』という単行本が出たが、これは1997年に東京都内で開催された第21回全国町並みゼミの内容をベースに集成された、編集子とほぼ同世代のプランナーや研究者、建築家、技術者の現段階での町づくり、地域づくりに関する最新レポートである。本号に掲載された日影氏のレポートも編集子の再構成を経て収録されているからぜひ手に取ってみてほしい。

近い将来、生活文化同人による作品集が刊行されたり、大平宿内に建築宿参加者一同で民家を建てる事業など実現したいものです。

「美しき夢はひろごり　かぐはしのこころあふれ」（大谷正雄詩集より）

〈M〉

—生活文化 第4号—

1999年8月発行

編集・発行 生活文化同人

発行所 同人機関誌編集局

(アカンサス建築工房内)

〒324-0055 栃木県大田原市新富町2-3-34

T E L 0287-22-2288

F A X 0287-22-7977

印刷所 有限会社イリサワ商事印刷部

〒320-0806 宇都宮市中央3-5-15